ナイトキラー

月乃宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ナイトキラー

【Ｎコード】
Ｎ２９４６Ｙ

【作者名】
月乃宮

【あらすじ】
孤児になったハンナ（ハナちゃん）は、実はお城のお姫様！？
お城暮らしする姫には必ず騎士が付くのですが、ハナちゃんは騎士のディルクと仲良くやっていけるのでしょうか……？

プロローグ

深い緑にかこまれた森にたたずむ、大きく真っ白なお城。
そこが私の『家』だ。

この国の王様である父上が、遠征先で知り合った女性に産ませた子供が私。
私の名はハンナ・ボーゼ。
ボーゼは母方の姓で、私は十二歳になるまで母の実家で、母と母の両親である祖父母と一緒に暮らしていた。

母の家は貧乏というほどじゃないけれど、質素でごくごく平凡な家庭。
私は自分の父親がどんな人か全く知らなかったし、まったく普通の子供として育てられた。

街の学校へ通っていたし、お友達もたくさんいた。
おだやかで平和で、しあわせな日々だった。

――そんな生活が一変したのは、私が十二になった時のこと。

まず流行り病で、母と祖父母が亡くなった。
孤児になった私は、隣町の孤児院に引き取られた。
そして孤児院にいること数か月……お城から迎えがやってきた。

なんと、私は城のお姫様だって言われちゃったのだ！

お城に上がったのはいいけれど、当然今までの生活とは全然違う。
私は『姫』で、お城が私の『家』。

慣れないことだらけだけど、それでも月日は三年過ぎた……。

（1）

「私に新しい騎士をつける、ですって！？」

【謁見（えっけん）の間】に呼び出された私は、玉座に座る王様の前ですっとんきょうな声を出した。

「オイゲンが亡くなってまだ十日しか経ってないのに……」

「気持ちはよおーっく分かるがな、姫に騎士なしではまずいのだ」

王様は人の良さそうな男前の顔を困ったようにしかめながら、なだめるような口調で切々と説き伏せるように話し続ける。

「昔からの伝統と習慣で、姫に騎士は必須なのだ。本当は十日も騎士なしで暮らさせた前例はなかったのに……でも、これでも大急ぎで適任者を探していたのだよ、ハナちゃん」

『ハナちゃん』とは私のあだ名で、なんでもどこかの国の言葉で『花』を意味するらしい。

今では王様をはじめ、お妃様や周囲の人たちの間では、この呼び名がすっかり定着していた。

それはともかく、問題は騎士の件だ。

三年前にお城に上がってすぐ私の騎士となったのが、オイゲンと呼ばれる齢七十五になるご老人だった。

本当は適任者が見つかるまでの予定でオイゲンが着任したんだけど、幼かった私がすっかりオイゲンになついてしまい、離れたくないとだだをこねた。

それでオイゲンは晴れて正式に私の騎士となり、つい十日前に肺炎をこじらせて亡くなるまでお役目を果たされたのだった。

オイゲンはとても優しいおじいちゃん騎士で、家族を亡くした私を大層かわいがってくれた。

だから亡くなった時は本当に悲しくて、せめて今月いっぱいは喪に服そう、と心に決めた。なぜ今月いっぱいかと言うと、来月からは春のお祭りやらイベントやらが盛りだくさんで、喪服など絶対禁止だからだ。

本当はお姫様だから、身内の不幸でもない限り喪に服すことは『前例がない』から駄目だって。

でも私はやはりだだをこねて、こうして喪服を着ることを許してもらってる。

そんなんだから、新しい騎士なんて言われても心の準備がまったくない。

私がむっとして「新しい騎士なんて早すぎる」ってつぶやくと、王様は玉座から立ち上がらんばかりに身を乗り出した。

「でもねハナちゃん、今度の騎士はとても優秀な男なんだよ？　それになんといっても、死んだオイゲンの親戚だし」

「え、そうなの？」

オイゲンの親戚……。

「そうそう、親戚なんだよ……とっても遠い親戚だけどね。ハナちゃんの話を聞いて是非に、と向こうから申し出たんだ。今年二十五になる男で、名は……」

「今年二十五！？」
オイゲンと五十歳も違うじゃないの。
「絶対イヤ」
「まあ、そう言わずに」
「そんな若い男の人としゃべったことないもの。きっと仲良くなんかなれないよ」
「そうはいっても、王族につく騎士は普通そのくらいの年齢が一番多いのだよ？　ハナちゃんの姉姫も妹姫も、皆こぞって若い騎士を取りっこしてるじゃないか」
「それはそうだけど……せめてもう少し年上のおじさん騎士とかいないの？」

四、五十ぐらいのおじさんだったら、昔住んでいた家の近所にあった行きつけのパン屋さんや雑貨屋さんのご主人で免疫があるもの。

王様は「うーん」と考えるようにアゴに手をあてて天井を見上げた。
その本当に困った様子に、私もさすがに気が悪くなってしまう。

「……でも、とりあえず会うだけ会ってみよっかな」
「そうしてくれると助かるよ、ハナちゃん！」
「あっ王様、立っちゃダメだよ！　謁見の間では相手が退出の礼をするまで、王様は玉座から立ちあがっちゃいけない『しきたり』なんでしょ？」
「おおそうだった。いかんいかん、今度立ったら『しきたり』を破ったのが五度目になってしまうところだった……おおいディルク！」
王様が声を張り上げると、奥の控えの間からスラリと背の高い男

の人が現れた。
その姿に私はびっくりして棒立ちになってしまう。
腰まである長い黄金色の髪に、翡翠(ひすい)のような緑色した切れ長の瞳。
スッと通った鼻筋に弓なりの眉は、間違いなく美形のそれだった。
それ以上に目を引くのは、腰に巻いた黒いサッシュ・ベルト……
黒サッシュは騎士の中でもトップクラスにだけ身につけることを許されるものだ。つまりこの人、超エリート騎士ってことになる。
「ふわああ、さっすが……王様の騎士様は違いますねぇ」
しみじみつぶやいた私に、エリート騎士様はかすかに眉を持ち上げた。
すると王様が「ちがうちがう」と首を振った。
「彼が、ハナちゃんの新しい騎士だよ」
「ええっ、この人が？」
「なんか問題でもあるのかい？」
「問題って別に……ただ、こんな急だと思ってなかったから」
「ならばさっそく今日、もとい今からこのディルクがハナちゃんの騎士だ……さあディルク、誓いの言葉を」
王様の言葉で、ディルクと呼ばれた騎士様はブーツの足音を響かせて私の目の前までやってくると、うやうやしく膝を折った。
「ディルク・ベッセルロイアーと申します。これより我が命をかけてハンナ姫様をお守りすることをここに誓います」
「うわっ、命なんかかけなくても、いいですって！」

私はあわてて手を振って後ずさる。
するとゆっくりと立ち上がったディルクはスッと目を細めた。
「そういうわけには参りません。『しきたり』ですから」
「『しきたり』？　あ、そっか。決まり文句だもんね」
えへへ、と笑う私に、なぜかディルクは不機嫌そうに眉をひそめた。
「ただの『決まり文句』ではありません。騎士は忠誠を誓った主に対して、命をかけてお守りするものです。でないと騎士道精神に反します」
真顔でキッパリ言いきったエリート騎士様に、私の笑いは凍りついた。
――――おカタイ人だなぁ。
それがディルクの第一印象だった。

（2）

「ハナちゃん、新しい騎士が決まったってホント？」

私の一個上で、姉姫にあたる仲良しのリーザちゃんがわくわくしながら身を乗り出した。

ただ今リーザちゃんのお部屋で、小さな丸いティーテーブルを囲み、紅茶とお菓子をいただいてる真っ最中。

リーザちゃんの母上は王様の側室なので、リーザちゃんも私と同じく王位継承問題とかに無縁の気楽な立場のお姫様だ。ただしリーザちゃんは生まれた時からこのお城に住んでいるから、町育ちの私なんかよりよっぽどお姫様らしい。

そんなリーザちゃんは、私の新しい騎士様に興味しんしん。

綺麗な青い目をきらきらさせて私を見つめている。

「しかもベッセルロイアー家のディルク様でしょ？　すごいわぁ」

「なにがすごいの？」

私がクッキーを手に首をかしげると、リーザちゃんは驚いたように長いまつ毛をパチパチさせた。

「ハナちゃん知らないのね。ディルク様は有名よ、優秀であの麗しさだもん。みんな自分の騎士にしようとやっきになってたのに、今まで誰にもなびかなかったのよ。それなのに突然ハナちゃんの騎士になっちゃったって言うじゃない」

「なんかね、オイゲンの遠縁なんだって。オイゲンが亡くなったから、代わりに私の騎士になったらしいよ」

「ええっ、ラッキー！　……って、ごめん。オイゲンのことは残念だったわね」
「ううん、気にしないでいいよ」

オイゲンの皺がよったやさしい顔を思い出して、私はちょっと悲しくなった。
オイゲンがもう少し若かったら、もっと長く一緒にいられたかもしれないのになぁ。

いかんいかん、暗くなってしまった。
葬式の後、オイゲンのお墓の前で誓ったんだ……これからも明るく生きてくってさ。暗くなんかなってたら、天国のオイゲンが心配しちゃうよ。

それにしても、ディルクがそんなに人気の騎士だとは知らなかった。

どうもお姫様たちは、騎士を持つことを一種のステイタスと考えている人が多いみたい。
正室様のお姫様たちなんて、多いところじゃ五人の騎士がいるって話だし……ところで五人もいてうるさくないのかなぁ？　そうリーザちゃんに言うと「五人はさすがにね、三人ぐらいならわかるけど」なんて言う。

「私なんて、一人でも持てあましているのに……」

私は新しい騎士様の生真面目な横顔を思い出してため息をついた。
第一印象をうらぎらず、ディルクは相当堅物な騎士だった。

「でもどんな騎士が何人集まったって、ディルク様にはかなわない

わよ。姫君たちどころか、あのカリスティ宰相だってモーションかけてるって噂じゃない」
「え、あの鉄面皮の宰相様まで！？」

カリスティ宰相様と言えば美人だけど、表情筋が死んでるんじゃないかってぐらい無表情で怖そうな人だ……まさかその宰相様にまで気に入られてるなんて。うむむ、こうなるとホントに私の騎士でいいものか悩んじゃうよ。

「とにかくハナちゃんはこれから大変よ」
「え、どうして」

リーザちゃんは腕を組み、大げさな調子で語り始めた。

「私たち側室の姫たちはさておき、正妻の姫たちは黙っていないわよ、きっと。あんなにディルク様を欲しがっていたもの。やっかみは避けられないわ」
「え、私いじめられるの？」

正室のお姫様たちとは住む宮殿がちがうし、滅多に顔を合わさないんだけど。

「いじめられる、ってレベルですめばいいけど。でも大丈夫、ディルク様に守ってもらえばいいわ」
「そ、そうだね……」

ディルクのせいでいじめられるのを、ディルクに守ってもらう……なんか複雑な気持ちだなぁ。

リーザちゃんとのお茶を終えて自分の部屋へ戻ってくると、そこには怒った顔のディルクが待ち構えていた。

「お出かけになるなんて、私はうかがってませんでしたよ」

「え」

「なぜ黙ってお部屋を出られたのです？」

詰問口調のディルクに、私はびっくりした。

「だって、リーザちゃんのとこへお茶しにいっただけだし……」

「私はうかがってませんでした」

「ちょこっとだから……」

「そういう問題ではありません」

びしっと言われて、私は不服げに頬をふくらませた。

だって、オイゲンにはそんなうるさいこと言われたことなかったもん。私はいつでも一人で自由に城内を出歩けたんだもの。

「オイゲンはそんなこと言わなかったよ」

「私はオイゲンとは違います。私は私のやり方であなたの騎士をつとめます」

私はふくれっ面のまま、そっぽを向いてソファーの上に座った。

もう無視しようって決めたのに、ディルクのお小言は続く。

「もう少し姫であるという自覚を持ってください。朝食の後のご予定は前日までに私に直接口頭でお伝えくださるか、もしくは当日の

朝に使いの者を通してお知らせ下さらないと。食後のご予定をうかがいにきたらお部屋はもぬけの殻だったなんてこと、今後一切まかり通りません」
「わかった、わかったから……もういいよ」
私は面倒そうに手を振って、なんとかディルクの話を打ち切った。
あーあ、こんなうるさい人がお付きの騎士になっちゃったなんて……誰か取りかえてくれるものなら、取りかえて欲しいくらい。
その時、私はピンときた。
――そうだ、ディルクを自分の騎士にしたがっている姫様たちが大勢いるんだった！
さっそく他の姫様にきいてみよう、と考えていると、ふと視界が暗くなるのを感じた。
見上げるとそこには、かがみこむようにして私の顔をのぞきこんでいるディルクの姿……私はソファに後ずさった。
「一体何をお考えです？」
「え、別に……」
「まさか、この私を厄介払いしようなどとお考えではないでしょうね？」
ぎくっ。
「よろしいですか、私はあなたの騎士であると同時に、この国に仕える騎士でもあります。私は王の御前であなたの騎士となると誓ったのですから、今さらそれを変更しようとしても無駄ですよ」
「そ、そうなの！？」

「やっぱり私を厄介払いしようとお考えでしたね……」

そのつめたーい空気に、私は冷や汗を流した。

なまじ綺麗で整った顔だから、怒るとすっごい迫力出るんだ。気の弱い私は、気がついたら必死にあやまっていた……なさけない。

「それで、本日の午後のご予定はいかがされますか？」

言われてみれば、もうすぐお昼近くだ。

今日は週末だから勉強もお休みだし、裏の森に遠乗りへ出かけてもいいなぁ。

「じゃあ西の森へ遠乗りに出かけようかな」

「かしこまりました。さっそく馬の手配をいたしましょう……どうぞ姫様はダイニングで朝食をお召し上がりください」

「あ、いいよ。お弁当を持っていこうと思うから。ちょっと厨房へ行って、何か適当なものを籠につめてもらってくる」

「私もお供しましょう」

そんなわけでディルクは厨房までついてきた。

あーあ、これじゃまるで見張られているみたいで息苦しいよぅ。

「ところで……その格好はどうされました」

「え、何が」

「服装ですよ。姫君のなさる格好とは思えませんね」

私は自分の服を見下ろした。

一応喪に服しているから、ひざ丈の黒のズボンに黒の上着。

「これでもいちおう女の子用なんだよ？　それに馬に乗るならスカ

ートよりこの方がいいでしょ」
「……今日のところは大目に見ることにしましょう」
そう言ってつい、と顔をそらしたディルクに、私はそっと肩で息をついた。
ホントやっかいな騎士様をしょいこんじゃったなぁ……。

（3）

晴れていて、気持ちの良い天気だ。
そよ風も心地良い……けどさ。

「ずいぶんと静かですね、ご気分でもすぐれないのですか」
「……別に」

私はむっつりとして目の前にある馬のたてがみを撫でた。
そのすぐ横でたずなを握る手がにくらしい。

せっかくの遠乗りなのに、どーしてディルクの前に乗らなきゃいけないの。
私はひとりで馬に乗りたかったのに。

いやがらせの意味もこめて、わざと背中に座るディルクに思いっきり寄りかかってみたけど、よろけるどころかビクともしない。

――あーあ、つまんない……。

「もうじき湖に着きますよ。こちらでお昼を召し上がられたらいかがですか」
「あーうん、そうだね……」

湖のほとりに到着すると、ディルクが馬からヒラリと飛び降り、私に手をさし伸べた。

「ひとりで降りられるのに」

ディルクに降ろしてもらった私は、籠を手にぶちぶちと文句を言いながらお昼の場所を見つくろう。ディルクは近くの木に馬を縛ってくると、私の手から籠を取り上げた。

「さあ、こちらへどうぞ……木陰がちょうど気持ち良いですよ」

そこは確かにフサフサの芝が広がっていて、木陰があってちょうどいい絶好のスポットだった。くうっ、いちいちそつが無くってしゃくだなぁ。

「……あれ、ディルクは食べないの？」

サンドウィッチをほおばりだした私は、木の幹に寄りかかって座っているディルクに声をかける。

「おいしいよ、コレ」

「私は結構ですから、どうぞ姫様だけお召し上がり下さい」

「そんなあ、一緒に食べようよ」

するとディルクは少し当惑した顔で私をじっと見つめた。

「私は一介の騎士です。王族の方々とご一緒に食事を取るのは……」

「そんなカタいこと言わずに。私がいいって言ってるんだから」

「しかし……」

ホント、おカタ人だなぁ。

「ひとりだけ食べるのは居心地悪いし、大体つまらないよ。ディルクも一緒かと思ってたくさん持ってきたから、食べないとこのサンドウィッチ無駄にしちゃうよ」

「……ではお言葉に甘えて」

少しためらう様子のディルクに、私は無理やりサンドウィッチを押し付けた。

「これサーモンだけど、苦手？」

「いえ、私の好物です」

「そっか、よかった」

ふとその顔を見上げると、こころなしか赤くなっている。

うわあ照れてるよ！

「……なんですか、その笑いは」

「いやいや、なんでもない……そうだ、ディルクはオイゲンの親戚だって言ってたよね。会ったことあるの？」

「ええ、子供の頃に数えるほどですが」

「へえ～、昔のオイゲンってどんな感じだった？」

「優秀な騎士だったと周囲からうかがっております」

「そういうんじゃなくて、ディルクはどんな風に思った？　やっぱりやさしいおじいちゃんって感じ？」

するとディルクは少し懐かしそうな目で遠くを見つめた。

「そうですね、物腰の柔らかな人でした。私の父ベッセルロイアー公爵ともウマが合い、若いころから酒を酌み交わす仲だったそうです。騎士として城へ上がられてからは、さまざまな王族の方々にお仕えしたと聞いております」

「へえ、じゃあ人気者だったんだね。血は争えないわけだ」

「どういう意味ですか？」

「ディルクも王族の人たちの間で人気があるって聞いたよ。姫様た

ちは皆、あなたを自分の騎士にしたがってるみたい」
「そうですか……」

するとなぜか隣の騎士様は、不機嫌な様子で押し黙ってしまった。
片ひざを曲げて座り、きらめく湖をながめているその姿は、まさに絵に描いたようなカッコよさである……ホントなんでこの人、私の騎士なんかやってるんだろ。王様の指名で私の騎士になったけど、もともとは本人の希望だって王様が言ってたよなぁ。

「あのさ、ディルクはどうして……」
「シッ……お静かに」

私はそのまま固まった。
次の瞬間。

「危ない！」

気がつくとディルクに覆いかぶさるように押し倒されていた。
頭の上にはビイイインと震える棒が宙に浮かんでいる……こわごわと首を曲げて後ろを見ると、木の幹に矢が刺さっていた。

「ひっ、ひいいい！？」
「おケガはありませんか？」

そのまま腰を抜かしてしまった私を、ディルクは軽々と抱き上げた。
ディルクの視線は、湖の対岸の茂みに向けられたまま。

「……逃げたか。あの距離ではもう追いつけない……姫様、今日はこのまま城へ引きあげましょう」

「ふ、ふわい……」
「こわかったですか？」

そう言ってのぞきこんできたディルクの顔は、いつもより少しやさしそうに見えた。
こわかったよ、ホント……だって、これって私を狙ったんだよね！？　正直私、涙目だと思う。

「い、いったい何が起こってるの……」
「調査は城へ戻ってからです。今は私がついてますので、姫様はご安心ください」

私はぎゅっ、とディルクの上着にしがみついてしまった。

（4）

それから一週間ほど、私は部屋にこもっていた。
外へ出たくなかったのもあるけど、とにかくディルクが部屋から出してくれなかったのだ。

そろそろ部屋にいるのもあきてきた頃、ディルクが報告書を手に部屋へやってきた。

「犯人の検討がつきました」
「ホント！？　よかった～、これで外へ出られるね！」

私は寝そべっていた長椅子から飛び起きると、嬉々として外出用のブーツに履きかえようとしたのに……ディルクに止められた。なんで？

「まだ外出はダメです」
「え、どうして？　犯人つかまったんでしょ？」
「検討がついた、と言っただけです。犯人はまだつかまっていません」

私は「えー」と落胆の声をあげた。
せっかく今日あたり、リーザちゃんと城下町にでも繰り出そうと思ったのに。

「犯人がわかっているのに、どうしてつかまえないの？」
「まだ証拠がそろってないからです」
「そんなあ」
「とにかく、まだ外出はいけません」

残念がる私に対し、ディルクはきっぱりと「外出禁止令」を私につきつけた。
仕方がないのでリーザちゃんに遊びにきてもらうよう頼んだら、ディルクはしぶしぶ譲歩してくれた。

「ではリーザ様の騎士には、続き部屋の【控えの間】で待機してもらいます」
「え、リーザちゃんが騎士を連れてくるの？」

今まで私の部屋へ遊びにくる時は、騎士なんか連れてきたことなかったのに。

「姫様の一件から、城内では警戒態勢が敷かれています。王族の方々は城内の移動にも騎士を同伴することが義務付けられるようになりました」

そうなんだ……なんか他の人たちにも迷惑かけているみたい。

「姫様のせいではありませんよ」

私の心を読んだように、ディルクが優しい声音でそう言ってくれた。
でもやっぱり私の一件が原因だからなぁ……責任感じちゃうよ。

午後になって遊びに来たリーザちゃんとゲーム盤を囲みながら、

話題は例の犯人についてもちきりだった。

「いったいどんな人なのかなぁ。ディルクはもう分かってるみたいだけど」

「それにしてもなんでハナちゃんなのかしら。御正室様の姫君や王子らならいざしらず、財産も権力も何もない私たちを狙っても、なんの特にもならないのにね」

ゲームの駒を手にリーザちゃんも考えあぐねているようだった。

「王様の子供ってだけで、別に王位継承権も関係ないし。まあこれで他国へ嫁ぐとなれば、いろいろな可能性もなくもないけど……」

「いろいろな可能性って？」

「うーん、たとえばお金持ちの国へお嫁に行くってことになってたら、誘拐して身代金を取ろうとか思ったり？」

「でもまだお嫁に行ってないのに、身代金って取れるの？」

「うーん……前借りするとか？」

「でも弓矢がこう、ビューっと飛んできたんだよ？　あれは誘拐とかじゃなくって……」

私はぶるり、と身震いした。

あれが当たっていたら、相当痛かっただろう……いや、痛いとかそれどころじゃなかったかも。

「怖いわね。とにかくハナちゃんを邪魔に思う人間がいるってことよ……いったい何が目的かしら？」

「さあ……王手（チェックメイト）」

私の言葉にリーザちゃんはガックリと肩を落とした。

「ううう、くやしい……ハナちゃん強い」
「約束通り、負けた方が勝った方にミントクリームパイおごるんだよー」
「分かったわ、明日にでも城下町へ買いに行ってくる」
そう言われて、私はちょっとシュンとしてしまう。
「一緒に行けたらいいのに……」
「仕方ないよ、ハナちゃんに何かあったら大変だもん。明日またパイ持って遊びに来るわ、ね？」
「うん、ありがとうリーザちゃん」
リーザちゃんを扉の前で見送ると、午後からずっと執務室で仕事をしていたディルクが入れかわりに部屋へやってきた。（そうなのだ、ディルクは私の騎士としてのお役目以外にも、いろいろと仕事があるのだ！　だからずっと私と一緒、というわけではないのだった……）
「お疲れですか」
「まさか、ゲームしてただけだもん」
ゲーム盤を片付け始めると、ディルクも一緒にしまうのを手伝ってくれた。
そろそろ日も暮れ始めている。
「リーザちゃん、明日もまた遊びにきてくれるって」
「そうですか」
「それでミントクリームパイを買ってきてくれるって。ゲームに勝ったからね」

ディルクは無言で、なにか考えるようにうつむいている。
「……外へ出たいですか」
きっと閉じ込められっぱなしの私に同情してるに違いない。
「そりゃそうだけど、でもいいよ。ディルクも皆も、頑張って犯人つかまえようとしてくれてるんでしょ。だから我慢する」
顔を上げると、ディルクがフワリと微笑んでいた。
「良い子ですね、感心しました」
「え、えへへ……」
突然のほめ言葉と笑顔（と呼ぶにはあまりにもささやかな微笑だったけど）に、なんて返したらいいか分からなくて曖昧な笑いを返す。
「ただし……自室にこもってるとはいえ、もう少しその格好はなんとかなりませんか」
「へ？」
私は自分のパジャマを見下ろした。
だって外に一歩も出ないなら、着がえたって意味ないし？
「目のやり場に困ります」
「は？」
「いえ、何でもありません。とにかく……だらしがない。きちんと着替えて下さい」
「でも、もうじき夜だよ？　もう今日はこのままでいいんじゃ……」

しかしお行儀にうるさい騎士様は、そこのところは妥協してくれなかった。

けっきょく私は夕食を食べるためだけに、しぶしぶ着替えることになったのだった。

（5）

翌朝、ディルクが固い表情で私の部屋に現れた。
足早に入ってきたディルクの様子に、ちょうど朝食中だった私はゆで卵をむく手をとめた。

「おはよう。どうしたの血相変えて」
「本日のご予定ですが、リーザ様と城下町へお出かけ下さい」
「えっ、いいの？」

私は卵を握りしめたまま、小さくガッツポーズをした。

――やったあ、やっと外出できる！

「そんなに喜ばないでください。これは最後の手段ですから」
「は？　最後の手段？？」

ディルクは苦々しい表情で視線を落とした。

「これ以上時間をかけないようにと、上から圧力がかかりました……よって早急に犯人を捕まえねばならなくなった次第です」
「はあ」

それはそれは、結構なことじゃないの？
だけどディルクは神妙な顔で私に向き直った。

「城下町へ行く話は、姫様をおとりにして捕まえるという計画の一端なのです」
「おとり？　私が？」

「そう、犯人をおびき寄せるのです。もちろん犯人に分からぬよう護衛はつけますし、私もおそばについております。しかし大変危険であることには変わりありません」

――そ、それは確かに、危険かも……。

ようやく事態をのみこめた物騒な話に、私は顔を青くした。

「うわあん、こわいようっ！」

「ご安心を……私が必ずお守りします」

ディルクは私の前にひざまづくと、深々と頭を下げた。

「申し訳ありません。私の力が至らぬばかりに……姫様をこのような危険にさらすことになるとは」

「いいっていいって、仕方ないよ……だって私より身分の高い、王族の誰かの命令なんでしょ？」

たぶんご正室様か、そのお姫様か王子様たちの命令なんだ、きっと。

「えらい人の命令なら、さからえないもんね……それにひきかえ私は、側室にすらなれなかった平凡で善良な一市民の母を持つ、ちっぽけな名ばかりのお姫様だもん。たとえおとりにされたって、文句言えないもん……」

「ご自分の事をそのようにおっしゃってはいけません」

ディルクは怒ったように、うつむく私の顔をのぞきこんだ。

「あなたは王家の血を引く立派な姫君です。大切に、大事にされて

然るべき方なのです……そのことを決して忘れてはなりません。いいですね？」

私はディルクの迫力に押されるまま、コクコクと首を縦に振るしかなかった。

「じゃ、じゃあさ、せめてこの状況を楽しむしかないね？　せっかく城下町へ出かけられるんだもの。張り切って出かけようじゃないの」

「まったく、あなたという方は……」

フッと苦笑をもらすディルクは、それでもあきれた様子もなくやさしげな表情を浮かべたのだった。

城下町は思ったより人が少なかった。

平日ってせいでもあるけど、天気があまりよくなかったからだろう。どんよりと曇った空は、なんだか今にも降り出しそうな予感。

「クラウスさんはどれにする？」

「そうだね～、僕はやっぱりミートパイかな。甘いのもいいけど、ここはミートパイも格別なんだよね」

栗色の髪に甘い顔立ちのクラウスさんは、リーザちゃん付きの騎士さんだ。

黒サッシュの次のランクである紫サッシュのクラウスさんは、やっぱりかなりのエリートのはずなのに軽口ばかりたたいてるから、

ぜんぜんエリートに見えないきさくなお兄さんだ。

ここは城下町でも有名なお菓子屋さんで、店頭ではさまざまな種類のパイが売られている。

甘いのからおかず系まで色んなパイが並んでいて、どれにしようか迷うのも楽しい。

「ミントクリームは捨てがたいけど、ミートパイも食べてみたいなぁ～」

「僕のを一口あげようか」

「え、いいの？」

するとズイッと私の前に立ちふさがる壁……もといディルクの背中。

「姫様には私の分を差し上げますので、どうぞお気づかいなく」

「おおコワッ……噂にたがわず真面目な男だなぁ。ハナちゃん、こんなおカタくて無愛想な騎士と一緒で気詰まりしない？」

クラウスさんは私と話す時はいつもこんな風に砕けた調子なんだけど、今日はクラウスさんが私に話しかける度に隣を歩くディルクがピリピリしてる。

――二人とも対照的な性格だからなぁ。

弱ったね、とリーザちゃんに話しかけようとしたら、すでに奥のテーブルでパイにかじりついていた……す、すばやい。私に輪をかけて甘いもの好きだからなぁ。

「……リーザ様、ちゃんと手は拭いた？」

あっと言う間にかけつけたクラウスさんは、かいがいしくリーザちゃんの世話を焼き始めた。
軽い感じの人に見えるけど、クラウスさんはちゃんとリーザちゃんの騎士なんだなぁとしみじみ思う。

リーザちゃんは私より一個上のお姉さんだけど、こう見てるとなんか子供みたい。
あーあ、チョコクリーム口の周りにいっぱいつけてるよ……クラウスさんはからかいながらも、ていねいにハンカチで拭いてあげている。ほほえましいなぁ。

「……で、姫様はミントクリームでよろしいのですか」

ディルクに声をかけられるまで、私はぼんやりと二人の様子をながめていた。

「ああゴメン、ぼーっとしてた。ミントクリームでいいよ」
「それから姫様……」
「なに？」

すると珍しくディルクは口ごもると、言いにくそうに切り出した。

「その、私と一緒だと気詰まりしますか」
「え……」

なんだ、クラウスさんの言ったこと気にしてるの？

「別にそんなことないよ。ディルクが一緒だと安心だよ？」
「そうですか……」

そう小さくつぶやくディルクの姿に、私は首をひねった。

（6）

お目当てのミントクリームパイを堪能した私は、食後の腹ごなしに緑豊かな中央公園へ行こうと提案した。

天気もだいぶ回復してきて、薄暗く曇っていた空に晴れ間がさしはじめていた。

来月から暦の上では春となるこの時期、公園ではたくさんの花々がつぼみをほころばせていた。

普段は城内の庭園に見慣れている私だけど、公園の草花をながめるのとは全然ちがう。たくさんの野草や小さな花々がちょこちょこあって、ほのぼのした雰囲気なのがいい。

また園内のあちこちでは春のイベントへ向けての準備も行われており、早々とお祭りにかこつけた出店もちらほら見かけた。

私はリーザちゃんと一緒に、動物の顔を模したへんてこなお面や、食べるとお腹の中まで真っ赤に染まりそうな飴がたっぷりかかったリンゴ等、あれこれ欲しがっては世話焼きな騎士様たちを閉口させた。

そんなこんなで夕方近くまで園内をうろつき、ようやく城へ戻ってきた時は日もほとんど落ちてしまっていた。

リーザちゃんたちと別れ、自分の部屋がある棟へ向かっている途中、隣を歩いていたディルクが「姫様」と物々しく口を開いた。

「昼間の話ですが」

なんだか真剣な表情だ。
「私が一緒だと安心、とおっしゃいましたね」
「え、うん」
そういえば昼間、お菓子屋さんの店内でそんな話をしたっけ。
「それはつまり、私のことを信頼して下さると理解してよろしいのですか」
「うん、そーだね……？」
なんだ、やけにこだわるなぁ……やっぱり初めの印象が悪かったのかも。
王様の前でしぶしぶ、って感じで騎士の誓いを承諾したからぁ。
私は立ち止ると、同じく歩みを止めたディルクに向き直った。
ここはひとつ、ちゃんと伝えておかないといけない。
「正直に言うと最初はしぶしぶだったんだ」
「……」
「でもね、今ではディルクが私の騎士でよかったと思ってるよ」
「……本当ですか。いろいろ口うるさいのに？」
私はあはは、とごまかし笑いをした。
たしかに口うるさいけどさ。
「でも、みんな私のためを思って言ってくれてるんだよね？」
ディルクは無言で私を見つめ、それから身を乗り出して私の両肩にそっと手を置いた。

私は目の前にある、整い過ぎた感も否めない顔をまじまじと見つめた。

「なにがあろうと、必ず私が姫様をお守りします」

「う、うん」

「だから……どんなことがあっても、必ず私を信じていて下さいね？」

ディルクの思いつめた様子に、私は若干たじろきながらも小さくうなずいた。するとディルクはあっさりと身を引き、いつものポーカーフェイスで私を促すように歩き出す。

私たちの間に流れる空気感は、かなりビミョー……今の会話はいったいなんだったんだ？

腑に落ちないままディルクと並んで歩いていると、廊下の向こうからあたふたと現れた兵士さんに呼び止められた。

「ディルク殿！　よかった、こちらにいらしたのですか！」

隣のディルクが怪訝そうな顔つきで兵士さんを見つめた。

その兵士さんはこの棟の警備をしてる人で、私もしょっちゅう見かけるから顔は知っている。あんなにあわてて、どうしたんだろう？

「ディルク殿、宰相様がお呼びです。すぐに討議の間へおいでください」

「カリスティ宰相が？」

ディルクはちらり、と隣の私を見た。

「姫様を部屋へお送りしてからうかがいます、と伝えてください」
「で、ですが、もう一時間以上前からお待ちされてるようでして……大・大至急お願いしますっ！　でなけりゃ下手するとアタシの首がふっとんじまいますよっ……」

兵士さんは汗をかきかき、完全におびえてた……私は『宰相様は仕事に関してウルトラ厳しい人』だという噂を思い出した。

――きっと、ものすっごく怒られるんだろうなぁ。

なんだか気の毒になってきてしまった。
私はちょいちょい、とディルクのそでを引っ張った。

「あのさ、私はここでいいから。ディルク早く行ってあげて」
「ですが……」
「私の部屋はすぐそこだから平気。大体この棟には顔見知りの女官さんたちとか警備の人たちばっかだから大丈夫だよ」

いまだ廊下の向こうで青ざめながら待ち構えている兵士さんの姿に、私は「ほらほら」と無理やりディルクの背を押してやった。

「……では、また夕食前にお部屋へうかがいます」
「はいはい、じゃあね」

ときどき私に振りかえりながら不本意な様子で歩いてくディルクに、私は苦笑気味に手をふって見送った。ようやく二人の姿が廊下の角に消えると、私はほっとして再び自室へと歩き出した。

――それにしても、宰相様の用事って何だろう。

もしかして私付きの騎士なんかしてないで、自分の仕事手伝えってことだったりして……うーん、なんか想像つかない。だって宰相様って、孤高の才女ってイメージだもん。誰かに、ましてや男の人に頼るなんて姿はありえない気がする。

――でも……異性として、だったら？

宰相様はチラリとしか見たことないけど（いくら城内とはいえ、執務エリアは王宮の中でも私にまったく縁の無い場所だから）すごい美人だ。だけど実際声をかけようと思うガッツのある人はなかなかいないらしい。きっと高嶺の花なんだろう。

でもディルクぐらい美形で優秀な騎士だったら、隣に立っても釣り合い取れそう。

ちょっと無愛想だけど、どうせ二人とも無愛想同士だからお似合いなんじゃない？

お似合い、ね……考えてたら胃ムカムカしてきた……。

「……ん？」

――あれ、口ふさがれている……？　なんか今度は頭がグラグラしてきた……。

そのまま暗転した。

ゆっくりと目を開ける。
視界が悪い……ここ、どこ？
「目を覚ましたわね」
声のした方角へノロノロと顔を上げる。
「……！？」
「驚いた？」
うん、だってそこには……猫のへんてこなお面をかぶった、ド派手なドレス姿の女の人が立っていたからだ。

（7）

「助けを呼んだって、だーれも来ないわよ」

そう言って高笑いをするのは、ついぞ公園の露店で見たような猫のへんてこなお面をかぶった女の人。

どうしよう私、悪い夢でも見てるのかな。

「あのう……」

「なによっ！？」

――け、喧嘩腰だなぁ……。

「これは夢ですか」

「はあ！？　馬鹿も休み休み言いなさいよ！」

「じゃあ現実か……あれ？」

――なんだろ、何か肝心なこと忘れているよーな……？

「何ひとりでぶつぶつ言ってるのよ？」

――あ、そうだ！

「襲われなかったんだ！」

「はあ！？　ちょっとあんた……」

そもそも城下町へ出かけたのは、私がおとりになって私を襲った犯人を捕まえるためだったじゃない！？　それなのにけっきょく襲われることもなく、なーんにも起こらないままお城へ帰ってきちゃ

ったんだ。

「そっかぁ……それはそれで、無事だったからよかったのかな」
「ちょっとあんた、今の状況分かってるの？」
「へ？」

そこで私は、ようやく周囲の黒い覆面姿の人たちに気がついた。
囲まれてる……何この人たち？

「大丈夫、危害は加えやしないわよ」
「ほ、ホントですか？」
「当たり前でしょ。そんなことしたら、仮にもあんたを護衛する役目を仰せつかっているディルク様の体面に傷がつくわ」

――え、この人ディルクを知ってるの？

「私はね、あんたと取引がしたくてここに連れてきたの」
「取引？」
「そ。単刀直入に言うわ、ディルク様をゆずってくれない？」

ゆずる？　いきなり何言ってんだ、この人。

「えっと、私が嫌だと言ったらどうなるんでしょう？」

おずおずとたずねると、猫のお面がニヤリと笑った（ように見えた）。

「後悔することになるわよ」
「ど、どのくらいでしょう……」
「すごーく、ね。この城で生きてくのがやんなっちゃうぐらい」

え、それは困る……私にはもう帰る実家がないんだから。

ここにきて、ようやく頭がクリアになった私は気がついた。

これって立派な脅迫じゃないか。それにこの状況って、どうみても私は囚われ人……誘拐？　拉致？　てことは……。

「うわあああ私とうとう襲われちゃったんだ！？　こ、殺さないで下さいっ……」

「だーかーら、危害は加えないっつったでしょ！　あんた人の話し聞いてんの！？」

「じゃーなんでこの間、森の湖にいるとき弓矢で狙ったのよ！　ディルクにかばってもらわなかったら、危うく当たるところだったんだからね！」

「まあああ～～～ディルク様にかばってもらうなんて、なんてにくらしい子！」

猫のお面はヒステリックに叫ぶと、肩ではあはあと息をした。

「アレはちょっとした手違いよ。おどかすだけだったんだから。身の程知らずのあんたに一矢報いるため～ってね」

「……」

「なによ、あたしに計画性が無いとでも言うの！？」

自分で言ってりゃ世話無いよこの人……私はうんざりして、そっとため息を漏らした。

――ちょっとディルクが離れた隙に、こんなことになるなんて……。

と、そこで私は気がついた。
確かディルクは、宰相様に呼ばれて私のそばを離れたんじゃなかった？
すると、もしや宰相様が犯人？
目の前に立つこの人が、まさかのまさか？
いや、そんなバカな。
宰相様は聡明で、超頭が切れる方って噂だ。よもやこんなアホな猫のお面かぶっているはずがない。
「とーにーかーく」
猫のお面がずずいっ、と詰め寄ってきた。
「あんたがディルク様を解放すればいいだけの話よ。簡単でしょ？」
「解放？」
「そ、ディルク様はあんたなんかの騎士でいていい方じゃないの。あんたみたいな身分も低い将来性のない子なんかに、ディルク様のような人もったいないじゃない」
「……」
「ディルク様がなんのために騎士の中でも最高ランクの黒サッシュまで昇進したと思ってんのよ？　だいたいね、あんたみたいな姫には不釣り合いよ、分不相応よ！」
「ごもっともで……」
――なんか、やけに説得力があるなぁ……。
「だいたい黒サッシュの騎士なんて、位の高い王族だって滅多に手に入らないのに、どうしてあんたがさっさと取っちゃうのよ。もっ

と身分の低い、ペーペーの白サッシュとかでもいいでしょ！」

その言葉に、ちょっとカチンときた。

手に入らないとか、取っちゃうとか、なんか人を物みたいに言うのって感じ悪い。

「聞いてるの！？」

「えっと……」

「聞いてましたよ」

聞きなれた声が響いたと思ったら、　ガタンと後ろから音がして……振り向くとまぶしい光が。

初めてこの場所が薄暗かったことに気づく。

開け放たれた扉にたたずむシルエットに、まぶしさに慣れてない目をぱちぱちとさせた。

あの長身は、どう見ても……。

「姫様、ご無事ですか！？」

「ディルク！」

ディルクは床に転がったままの私に駆けつけると、まずは私の頭から足先までざっと視線を走らせた。

「ケガは無いようですが……どこか痛むところはありますか？」

「ううん、へーき」

ディルクは私の言葉に一瞬ホッとした表情を浮かべたが、すぐに険しい表情で周囲をぐるりと見回した。

「さて、事の次第をご説明願いましょうか……レオノーラ姫」
「な、なぜ、わたくしの事がおわかりになったの！？」

ディルクの言葉に、猫のお面が驚いた表情を浮かべた（ように見えた）。

周囲の黒覆面軍団がじりじりと間合いを詰めてくる。
でもディルクがチャキリ、と剣の柄を鳴らしたとたん、ざざざーっと潮が引くように後ろに退いた。

「リラ王妃の第三王女レオノーラ姫、そう存じ上げますが？」

ディルクは淡々とした口調で問い詰めると、猫のお面はがっくりとうなだれた。
やだ、この人泣きまねまでし始めたよ？　でもマヌケなお面のせいか、どうも真剣みに欠けるなぁ……。

「この度はまた、大それたことをされたものですね」
「ご、誤解ですわディルク様！　わたくしは、わたしくは何も……」
「自分の主に手を出され、私も騎士として黙って見過ごすわけには参りません」
「そ、そんな……お待ちになって……」

猫のお面が懇願するように両手をにぎりしめたが、ディルクの冷徹とも言える態度は頑として変わらない。

ちょうどその時、なんだか戸口の方がだんだん騒がしくなってきた……すると今度は明るい、のん気な調子の声が張りつめた室内に響く。

「おいたはそこまでですよ〜、レオノーラ姫」

扉の前にはクラウスさんが、いつの間にか大勢の武装した兵士と共に立っていた。

クラウスさんはまっすぐ猫のお面……もといレオノーラ姫の前までやってくると、にっこりと微笑んだ。

「現行犯逮捕だから言い逃れはできないよ？　あきらめましょうよ、ね？」

「クラウス様まで……どうしてどうして！？」

「ほらほら、きちんと罪を認めなさいよ。今なら三食昼寝付き、一ヶ月の謹慎処分で手を打つけど、どう？」

「うううう……おやつもつけてもらえるのかしら？」

「うーん、譲歩してみますか」

私は床に座り込んだまま、呆けたように二人のやりとりをながめていた。

するとふわりと視界がゆれて、気がつくとディルクに抱き上げられてた。

――うわわ、ちょっと……お姫様だっこは、さすがに恥ずかしいよ！

私は「自分で歩けるから」と、じたばた手足を動かしたが、一向に降ろしてくれる気配はない。

観念して抱かれるまま体を預けると、ディルクの腕に一瞬ぎゅっと力がこもった。

「姫様、こわかったですか」

「え……ぜんぜん」

問われて初めて、私は全然こわくなかったことに気がついた。
心のどこかで大丈夫、きっとディルクが助けてくれるって信じてた……だからかな？

顔を上げると、私を見下ろすディルクと目が合った。やさしい瞳がなんだか、こそばゆい……。照れる気持ちをごまかすように、私はえへへと笑った。

「だって、私の騎士様が守ってくれると思ってたもん」

（8）

後から聞いた話だけど、あの日お城に帰ってきた瞬間から『おとり作戦』は実行されたらしい。

兵士がやってきて、ディルクが宰相様に呼び出されたことは、すべてその作戦の一部だったんだって。つまりディルクはあの時、わざと私を一人にしたのだ。

この件に関して、ディルクは何度も私に頭を下げて（！）あやまってくれた。

なんでも事前に行なわれた打ち合わせ（作戦会議があったんだって）の際、私をエサ？に現行犯逮捕することについて、ディルクは最後の最後まで反対していたらしい。

「でもレオノーラ姫は、ディルクを自分の騎士にしたがっていたから、ハナちゃんに危害を加えるつもりはなかったんだ。主を守れなかった騎士の面目は丸つぶれだからね。とにかく少しでもハナちゃんに危害が及びそうになったら、すぐさま計画を変更してハナちゃんを助ける予定だったんだよ」

そうクラウスさんが後から説明してくれた。

城下町にいたときは、私たちは影から護衛されていた。当然、私を狙っている集団もそれには気がついていた。だけど城に帰ると護衛が手薄になったもんだから、私たちの気が緩んだと誤解して……それでまんまとディルクたちの作戦に引っかかったようだ。

私が連れさらわれ、ディルクとクラウスさんが後をつけていった

ところ、例の猫のお面をかぶったレオノーラ姫が現れたのだ。それでまんまとあれこれしゃべってくれたもんだから、現行犯で取り押さえたってわけだ。

これで事件解決、めでたしめでたし……の、はずだけど。

「はあ……」

私は何度目か分からないため息をついた。

部屋の窓辺に座って庭の花々をながめる。手入れの行き届いた庭は、先日町の公園で見た草花に比べると人口的で味気なく感じた。

――あの公園の草花の方がいいなって思う私は、やっぱり庶民感覚なんだろうなぁ。

レオノーラ姫にはしてやられたけど、今回の件ではっきりと気づかされたことがある。いや、もう初めから気づいていたこと……気づかないようにしていたこと。

……ディルクは本当に、私の騎士でいいのだろうか、ということ。

ディルクは本来、もっと身分の高い王族に仕えるべき騎士なのだ。私のような名ばかりの姫に仕えてたって、彼の将来には一文の徳にならない。

「姫様、お呼びでしたか」

ノックの後、静かに扉を開けてディルクが部屋に入ってきた。

私は窓辺の椅子に座ったまま振り返ると、凛々しい立ち姿の騎士様をじっと見つめる。

――そうだよなぁ……やっぱりこのままじゃダメだよなぁ。

私は少し緊張気味に、おずおずと口を開いた。

「実は話があるんだけど」

深呼吸をしてから、私はゆっくりと切り出した。

「あのね、私の騎士を辞めたらどうかなって」

ディルクの身体が微かにこわばった。

顔を見ると、そこには険しい表情が浮かんでいる……私は緊張で乾いたノドをゴクリと鳴らした。

「えっとね、やっぱりディルクが私の騎士なんて、変だと思うんだ」

「……」

「ほら私なんかさ、身分もちっとも高くないし。仕えてったって何の得にもならないよ？　出世だってできないだろうし」

「出世はする必要ないでしょう。私は黒サッシュですから」

そうだった。

騎士の位で一番高いのは黒サッシュだから、これ以上昇進しようもないか。

「それに姫様にお仕えして私にメリットがあるかどうかは、私自身が判断することです」

「そ、そっか……」

「あと、ご自分のこと『私なんか』とおっしゃられるのは感心しませんね」

ディルクは私の前に進むと、ゆっくりと膝を折った。
左手を取られ、その指先に……ディルクの唇が触れた。
「私をあなたの騎士でいさせてください、ハンナ姫」
緊張のあまり、私の身体はカチコチに固まってしまう。
なんなのこれ、もんのすごく恥ずかしいんですが！？
「私が姫様の騎士でありたい、と思ったのはオイゲンの葬式の日でした」
唐突な告白に、私は引っ込めようとした手を止めて目を丸くした。
私を見つめるディルクの瞳が切なげに細められた。
「あの日、姫様はオイゲンの墓の前で誓われましたね……『大丈夫だから心配しないで、立派な姫君になるから』と」
「あ、あれ聞いてたの？」
その時のことを思い出して、私はますます赤面してしまう。
お葬式に出席していた人は皆帰ってしまって、あの場には私ひとりしかいないと思ったのに……まさかディルクがいたなんて、ちっとも気付かなかった。
オイゲンのお墓の前で何を言ったのか、正直よく覚えていない。
お葬式の直後だったし、胸がいっぱいで……必死に言葉にするにも支離滅裂だった気がする。
『いい子になるよ』とか『勉強頑張る』とか誓った気もするけど、途中泣いていた気もするし、『なんでひとりぼっちにするの』とか

怒っていた気もする。

――やだなあ、あれ聞かれてたなんて……。

「立ち聞きするつもりではなかったのですが……申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げて謝罪するディルクに、私は「い、いいよ別に」とあわててなだめる。

後ろで束ねた金色の髪が、ディルクの肩口からサラリとこぼれおちる。顔を上げると、翡翠のような緑の瞳……その奥には、何かを懐かしむような不思議な感情がにじんでいた。

「私はオイゲンがうらやましかった」

「え……」

「あのように最後まで主に愛される騎士になれたら、どんなにか幸せだろうと思いました」

その言葉に、私の涙腺が急激にゆるんでいく。

自然と涙がぽろぽろとこぼれていくのを止められそうになかった。

「泣かないで下さい……姫様」

どうしちゃったんだろう、涙が止まらない。

オイゲンがどんなに好きだったか、大切だったか……オイゲンがどんなに私を大事にしてくれ、守ってくれていたか、今更ながら思い出してしまう。

家族全員を失ったばかりの私を、オイゲンはまるで本当の孫娘のように扱い、接してくれた。

オイゲンはやさしくて温かくて、でもどこかひょうきんで。
慣れないお城での生活も、オイゲンと一緒なら気楽で楽しかった。
一緒にご飯食べたり、散歩したり。
はしゃいだり、笑ったり。
時には喧嘩もしたけど、最後にはいつも意地張り合ってるのがばかばかしくなって、お互いあやまって、それから二人でよく泣いた。
泣きながら、また笑いあった。
――私の小さなお姫さん、いつも元気で笑っているのが一番じゃ。
そう言って頭をなでてくれたあの手はもう無い……永遠に失われてしまったのだ。
もう一緒にいられないんだ。もう会えないんだ。
手のひらで受けとめる涙が、濡れた感覚が、事実をやたらリアルにする。
オイゲンがいない事実を、私に突きつける。
涙がこぼれ続ける目を手の甲で強くこすっていたら、ふと視界が暗くなった。
次の瞬間、あたたかい腕にふわりと包まれていた。
「これからは、私がおそばで姫様をお守りします」
「……ディルク」
「私がずっと、あなたをお守りします……ずっと」
ひどくやさしい言葉に、私はもうひとしきり泣いてしまった。

エピローグ

人・人・人の波。

青空の下、選りすぐりの騎士達がトーナメント形式で戦う、春の闘技大会が繰り広げられていた。

メイン会場である城内の中庭には、二週間ほど前から準備された50メートル四方の闘技台が設えてあり、先ほどから剣の交わる硬質な音が響いている。

「むううう、なんにも見えない……」

やっと会場に着いたのに、すでに人の垣根が何重にも連なっているせいか全然前が見えない……こういう時、背が低いってホント不便。それでも押しあいへしあい、やっとこさ人の波をかいくぐってきたのに。

「わ、わ、わ、ちょ、ちょっと待っ……はわわわ」

つ、つぶされる！　イタイ、ちょっと押さないでよう！

うううう、めげそう……いやいやあきらめちゃダメだ。だって、だって。

「きゃあっ、ディルク様ーーー！」

「ディルク様、がんばってーーー！」

そう、私の騎士様の試合だもん。

仮にも主人の私が見逃すわけにはいかないでしょう？

「お、お願い〜、ここ通して下さいーーー……」

私の懇願？もむなしく、相変わらず人の波に押されまくって、もはやどこへ向かっているのか不明と言ったところ。先に会場へ向かったリーザちゃんたちが場所取りしてくれてるはずだけど、これじゃリーザちゃんがどこいるかなんて分かんないよう。

その時、再び歓声と共に声援が上がった。

ああん、私だって見たいのに〜〜〜！

これもみんなエポック先生が私の宿題を無くしたりするからだ。

のんびり屋なおばあちゃんのエポック先生は、私がお城に上がった時から勉強を見てくれてる先生でとてもいい人なんだけど、うっかりしててよく物を落としたり無くしたりするんだよね。

今日も「昨日提出してもらった宿題のノートどこへいったのかしら」なんてことになって、ただでさえちらかってる先生の書斎をさらに散らかしつつの大捜索になり、気がついたらすっかり遅くなってしまったのだ。

「イタッ！」

てて、壁に思いっきり押し付けられた……壁？

見上げると城壁を守るために設えられたレンガ造りの塀があり、その上には大勢の観客がよじ登って観戦している。

——よおし、コレだ！

私はさっそく足場を探して塀の上によじ登ると、隣の人に習って立ち上がろうとした。けれど、ここもひっきりなしに人が登ってく

るため混み合っていて、しかも塀の幅も狭いからなかなか体のバランスが取れない。

塀の上でうずくまったまま首をひねると肩越しに闘技台が見え、金色の髪をなびかせて戦うディルクの勇姿が目の端に飛び込んできた。

このまま後ろ向くのはキツいなぁ……両隣にはすでに人が立ってるし。

でも背を向けたままじゃ、試合全然見えないし。

どうやって動けばいいか考えあぐねていたら、横から波のように押し寄せてきた衝撃で、私の足はズルッと塀の上から滑り落ちる。

「ひゃあ！」

かろうじて両手で塀にしがみついたけど、宙ぶらりんの状態……く、くるし。

ジャンプして飛び降りようかと下をのぞいたら、人がぎっちり詰まってて陸地が見えない。このまま飛び降りたら、誰かの頭を踏んづけちゃう。

――うわーん、どうしよう！？

と、その時。

ひと際大きな歓声が会場内に響いた……な、何があったの！？

え、え、試合どうなったの！？　なんか変なざわめきが聞こえるけど……ま、まさかケガ人が出たとか！？

「姫様！」

聞きなれた声と共に、いきなり腕をグイッと上に引き上げられた。
片手でしっかりと私を抱きかかえたその人は……

「ディルク！？」
「何をやっているんです、あなたは」

少し乱れた金色の前髪が一筋、高い鼻梁にかかっている。
ちょっと途切れがちの息に、私ははっとしてディルクのシャツの胸元をつかんだ。

「試合はどうなったの！？」
「どうもこうもないでしょう。あなたがこんな所から落ちそうになったんですから」
「え、え、え……？」

ふと首をひねって周囲を見渡すと……会場中の視線が私たちに向いている。
そして闘技台の上には、剣を片手に呆然とこちらを眺めている騎士の姿が見えた。

よく見るとディルクの手には、いまだ鞘（さや）におさめていない剣が握られていた。試合を中断させてしまったんだ……私のせいで。

「ぶら下がっているお姿が見えた時は、心臓が止まるかと思いましたよ」
「わわわ、ゴメン……」
「本当に悪いと思っているのですか」

私はあわててコクコクとうなずいた。
「試合の邪魔してゴメン！　来るの遅れちゃったけど、後ろの方で大人しく見てるつもりだったんだよ？　ホントだよ？」
必死にあやまりながら見上げたディルクの瞳がスウッと細くなっていく……ヤバイ相当怒ってる。
「え。ひゃああ！」
グラリと身体が宙に浮いた……と思ったら、ドサリと芝の上に落ちていた。
いや、正確に言うと、ディルクに抱えられたまま芝の上に落ちていたんだ。どうやら背中から落ちたらしいんだけど、体は全然痛くなかった。もしかして私、ディルクをクッションにしちゃった！？
「ディルク！　大丈夫！？」
「受け身をしたので大丈夫です。内側は人が多いですからね」
そう言って私を芝に降ろすと、スラリと立ち上がった。
え、え？　もしかしてわざと落ちたの！？
「あの、試合は……」
「もう終わりました」
「え、でも途中だったんじゃないの？」
「闘技台から１０秒以上離れると、その時点で失格と見なされますので」
え、ええええ〜〜〜！？

「ゴメン、ごめんなさいディルク！　私のせいで！」
「まったく、あなたは本当に世話が焼ける」
大きくため息をつかれて、私はガックリとうなだれてしまう。
あああ、こんな事なら試合を見に来るんじゃなかったよ。
愛想つかれちゃうなあ、こんなんじゃ……私はもう一度きちんと謝罪しようと頭をあげたら、思いがけずディルクの顔が間近にあった。
「試合なんか、どうでもいいのです」
「え……」
「私はあなたをお守りできれば、それで十分ですから」
そう言って、ディルクはいつの間にか鞘におさめた剣の柄に手をかけると、もう片方の手を私に差し伸べた。
「部屋へ戻ったら、お説教ですからね」
「ふ、ふあい……」
しっかり手を取られ、ふらふらとおぼつかない足取りで連行される。
ヤバイこのままじゃ、しこたま怒られてしまう……。
「私にとって一番大事なことに気づけないなんて……困った人ですね」
そういって騎士様は苦笑を洩らすと、私の手をぐっと握りしめたのだった。

（おわり）

野に咲く花のように

「帰国早々、すぐにでも出立したいと？」
「はい」

まだまだ壮齢の国王は、黒い髭に包まれた端正な顔をしかめてみせる。
謁見の間の最奥に設えられた玉座に着き、目の前でうやうやしく膝を折る黄金の騎士を見下ろしてため息をひとつついた。

「なあディルク、そろそろ城に落ち着こうとは思わんか」
「と、おっしゃいますと？」
「しばらく誰かの専属騎士になってみてはどうだ。そなたを我が騎士にと望む声は多い。なんでも裏では密かに予約待ちリストまであって、引く手あまただそうじゃないか？」

ディルクは一瞬嫌そうな表情を浮かべて見せた。普段がクールなポーカーフェイスだから、これは彼にとって珍しいことだろう。

「そのお話は何度もお断りしたはずです。私は誰の騎士になるつもりもありません」
「だがなぁ……そうか、うーん、それは残念だな……」

キッパリと断るディルクに、さすがの国王もゴリ押しできない。
なぜなら黒サッシュの位を持つ騎士のみに与えられた『任務選択の自由』という『しきたり』のためだった。この城には昔から続く伝統的な『しきたり』が多く、たとえ国王でも遵守しなくてはならない。

それでも国王は往生際悪く食い下がる。
子供たち……つまり多くの王子や姫君たちに「なんとかディルクを城にとどめて」とせがまれているのだ。子煩悩な国王はなんとか目の前に立つ騎士のかたくなな心を変えられないものかと腐心しているのだ。

「せっかく三年半ぶりの帰国ではないか。こちらの冬もそろそろ明ける頃だし、せめても春の祭典までゆっくりしたらどうだ？」
「……しかし」
「まあいいではないか、な？　そうと決まったら祭典の闘技大会に参加してもらおう。たまには若い者とも手合わせしてやってくれ。若輩者の騎士らにとって、黒サッシュの騎士と戦えるのはよい刺激になる」

人好きのする国王の笑顔に、ディルクはやれやれ、と内心ため息をついた。

ディルクは十五で騎士となり、十六になる頃にはすでに城内・外で注目を浴びる存在だった。
名門ベッセルロイアー家の出身というサラブレットの血筋はもちろん、傑出した剣術に加えて、常に冷静沈着な物腰、おまけにスラリと長身で酷く整った容貌を持ち合わせていたものだから無理もない。

騎士の位は腰に巻くサッシュベルトの色で表され、王族の専属騎士ともなれば白・緑・青・紫・黒の五つの位の中で三位の青サッシ

ュ以上というのが普通だ。だがディルクの場合、一番下の白サッシュの頃から『自分の専属騎士にしたい』という王族（主に姫君たちから）の強い要望が殺到していた。

王族たちは自分付きの騎士を、いわば一種のステータスのように思っている節がある。

対して騎士たちは、王族の専属騎士となれば華やかな表舞台と多額の報酬が約束される。

だがディルクはそんな価値観を持ち合わせておらず、王族の見栄や気まぐれに付き合わされるなんてまっぴらだと常々思っていた。それよりも諸外国へ渡り、異国の地で執り行われる外交的任務に携わったり、国内にまだまだ点在する未開拓の地を視察する方が己の見聞を広められ、よっぽど実になると考えた。

断れど断れどしつこくかけられる王族達からの誘いに正直辟易していたディルクは、わずか十八で異例の黒サッシュの位を授かると同時に城を出て、遠く離れた異国の地での任務に着くことになった。

任務期間は三か月といった短いものもあれば、時には一年、二年と長く続くこともある。

いずれにせよ、城に留まるつもりがなかったディルクは、ひとつの任務が終わるとすぐまた次の任務へと、ほぼ切れ目なしに旅立っていくのが常だった。

そんな生活を続けて早七年……ディルクもすでに二十五になっていた。

騎士としての風格はもとより、男振りも格段に上がっていた。

そんなディルクのこの度の帰還に、城の姫君たちが放っておくは

ずもない。

麗しくも凛々しい騎士様をひと目見ようと、城のあちこちにスタンバイしている者達……その大半はミーハーな女性だが……に、ディルクは心底うんざりしていた。

国王との謁見の後、ディルクは足をのばして城に住むベッセルロイアー家の長女で実妹でもあるノエミを訪れた。今年二十歳を迎えたノエミは第一王子の妃で、城に上がって五年経つ。

昔からお兄ちゃん子だったノエミに久しぶりに会いたいとせがまれ、めったなこと以外では城から出られない身分となってしまった妹のために王宮の奥へと足を運んだのだ。

妃の住居がある宮殿のテラスでノエミに出迎えられたディルクは、昼下がりのほんのひとときお茶に付き合うことになった。

聡明なノエミとの会話は国内の情勢や外交にまで至った。

やがて「堅い話ばかりっていうのもね」と、話題は城内の出来事や噂話へと移る。

いまだ「是非、我が騎士に」といった姫君たちからの熱烈なラブコールに逃げまわる兄ディルクに対し、ノエミは白い歯をのぞかせておかしそうに笑ってみせた。

「中には私に取り入って、あわよくば兄様を紹介してもらおうって

魂胆の姫たちもいるのよ。まあ真面目な兄様の気持ちは分からなくもないけれど、王族の専属騎士をつとめる経験は悪いことばかりでもないわよ、きっと。いい加減一度ぐらい誰かの騎士をつとめておかないと、収拾つかないかもしれないわ」
「しかし……」
「兄様だって、いつまでも逃げてばかりいてはだめよ。オイゲンだって、あの年で現役復帰したのだから」
「まさか、オイゲン殿が？」
「父上も笑っていたわ。若い姫に振り回されて年寄りの冷や水にならんといいが、って」

ノエミはほがらかな笑い声を立てた。
しかし笑いごとではない、とディルクは眉間にしわをよせる。

すでに齢七十五となったオイゲンは、若い頃こそ武術に長けた黒サッシュの騎士としてその名を轟かせたが、寄る年波には勝てず神経痛やらリューマチやらで肉体的には相当まいっているはずだ。

「一体いくつなんだ、その姫は？」
「確かまだ十四、五よ。本当はオイゲンは、その姫の正式な騎士が決まるまでの、いわば仮の騎士として役目を引き受けたそうだけど、その姫がすっかりオイゲンに懐いてしまったらしいの。どうしてもオイゲンがいいと言うものだから、国王様もしぶしぶ承知したみたい」

どうやらその姫は、かなり国王に気に入られているらしい。

「国王様ってば、二言目にはハナちゃんがどうしたこうしたって、暇さえあればハナちゃんに会いたがっているのよ。あんなに大勢の王子や姫がいるっていうのに不思議なものね」

「そんなにご執心なのか」
「ええ。確かにハナちゃんは町育ちだからか、お城育ちで気位の高い姫たちと違って、どこか素朴な感じがして可愛いのよねぇ……今じゃオイゲンもメロメロよ。『ハナちゃん』って呼び名もオイゲンがつけたのよ。本当はハンナって名前だそうだけど、なんでも『ハナ』って東の国の言葉で『花』を意味するそうなの。親しみやすいから皆そう呼んでるわ」

楽しそうに説明するノエミにも『ハナちゃん』は気に入られているらしい。
しかしディルクは興味なさげに頬杖をつくと、テラスから望む庭園の景色に目を移した。

もうじき春も近づいているため、念入りな手入れが施されているであろう草木や灌木、花壇などには、小さな新芽と共に固い蕾をそこかしこにふくらませている。

――そういえばここ数年、この土地の春を見ていなかったな。

すぐにでも次の任地へ旅立つつもりでいたディルクだが、国王もせめて祭りが終わるまではと引きとめる中、たまには故郷で春を迎えるのも悪くないかな、と思い始めていた。

帰還して三日目の早朝、所用で非公式に城へ出向いたディルクは、騎士の詰め所となっている東の塔で老騎士オイゲンとばったり出くわした。

「おはようございます」
「おお、確かリヅルの息子の……大きくなられたな！」
その言葉に、ディルクはちょっとだけ顔を赤らめる。
リヅルとはディルクの父であるベッセルロイアー公爵の名前で、オイゲンとは遠縁ということもあって旧知の仲だ。だからいまだにディルクのことも、子供のように思ってしまうのだろう。
「オイゲン殿もお変わりないようで何よりです」
「いやあ、私も年でなぁ。ちょっと走りまわるだけでも、すぐ息が上がってしまう。なんせこの年で、お若い姫さんの専属しとるんでな」
そう言ってカラカラ陽気な笑い声を立てるオイゲンに、ディルクは微かに口元を上げる。
どうやら噂の姫君はかなりお転婆のようだ。
「ディルクは確か異国の地から戻られたばかりであったな。ではハンナ姫をご存じないだろう？　私も含め皆『ハナちゃん』とお呼びしてる姫さんなんだが」
「先日、妃殿下からうかがったばかりです。なんでも国王様が大層お気に召されてらっしゃる姫とか」
妃殿下とはノエミのことである。
実の妹とはいえ、王家に嫁いだノエミはディルクより身分が高くなるため、公の場では敬語を使うことになっていた。
「国王様どころか、ハナちゃんは皆に好かれとる。その名の通り、野の花のようにあどけない姫君であられるからな……とと、こうし

ちゃおれん。そろそろハナちゃんが起きる時間だ」

そう言って、オイゲンは足取り軽く去っていく。

少し丸まった老騎士の背を見送りながら、ディルクは眉を持ち上げた。

バラでもスミレでもなく『野の花』と呼ぶところ、きっと十人並みの容姿の、だが愛嬌のある姫なのだろう。ノエミから聞いた話では、その姫君の母親は庶民の出だそうで、彼女が流行り病で亡くなるまで、その姫は町中で育ったと言う。

しかし周囲からの話を聞く限り、同情の目で見られているわけではなさそうだ……その姫の人柄に、人を惹きつけるなにかがあるのだろう……オイゲンやノエミの言葉を頭の中で反芻しつつ、ディルクはそんな感想を持ったのだった。

それから二週間ほど経った、ある晩のこと。

城下町の外れにある公爵家の屋敷で、ディルクは父ベッセルロイアー公爵と共に遅い夕食を取っていた。

すると突然ダイニングルームの重々しい扉が開き、よく躾けられた使用人が少々取り乱した様子で現れた。

「ご無礼をお許しください。たった今、城から早馬が来られて、オイゲン様のご容体が急変したとのご連絡を承りました」

オイゲンはここ数日、季節風邪をこじらせて床に伏していたのだ。

公爵は厳しい表情で立ち上がると「すぐに迎えの馬車と医師の手配を」と短く告げ、ディルクに振り返った。

「私は仕事のため明日の朝一番でここを出立せねばならぬ。後を頼んだぞ」

「はい」

公爵は明日から遠方の地へ視察へ赴かねばならないので、留守の間は屋敷の管理をディルクに任せることになっていた。

「まったくオイゲンめ……風邪なんぞこじらせおってからに。病状がひどくなる前に宿舎を出て、うちの屋敷で養生しろと再三言って聞かせたのだが」

口惜しそうな表情でそうつぶやく公爵は、遠縁とはいえ実の兄弟より気を許している老騎士の身を案じるあまり大分顔色が悪い。

翌日になり、少々心残りをする様子で旅立った公爵は、何か虫の知らせでもあったのだろうか……後日ディルクはその時のことを振り返っては、そう思うのだった。

公爵が旅立ってから五日後……風邪をこじらせて肺炎を患ったオイゲンは息を引き取った。

その花束にディルクが気づいたのは、オイゲンの葬式が執り行われる当日の朝だった。

葬儀場となる教会内で、ディルクは式が始まる直前の最終確認を行っていた。

教会関係者の一人と式場内を歩きつつ、祭壇にさしかかったところでディルクは『それ』に目をとめ、微かに眉を上げた。

祭壇は一面、白い花で埋め尽くされていた。

しかしその陰に、だが棺の一番近くに、ピンクや黄色の雑草とも呼べるくらいちっぽけな花束がちょこん、と置かれていたのだ。

「葬儀の花はすべて白にする手はずだったろう。この花は片づけてくれ」

「ですがディルク様、それは故人が生前大事にしていた物だとうかがったものですから……」

「オイゲン殿が？」

「ええ。病床でお世話をしていた使用人の一人がそう申しておりました」

式は午後から執り行われるため、一度屋敷へ戻ったディルクはダイニングで昼食をとるかたわら、その使用人を呼び出して話を聞いてみることにした。

「そうですわ。オイゲン様はその花束を大層お気に召してらっしゃいました」

年若い使用人の娘は、滅多に直接話したことのない端正な風貌の若主人を前にして顔を赤らめると恥ずかしそうにうつむいた。

「オイゲン様が屋敷に来られてから、毎日お城からお見舞いの品々が届いておりました。そのうちの一つでございます」
「誰からの見舞いか分かるか？」
「いえ、それは……でもオイゲン様は何よりその花束を喜ばれ、大事にされてました。いつでも見えるように、枕もとのテーブルに飾りたいのだとおっしゃられたので、私が小さな花瓶にその花を生けてお運びしました」

城から見舞い品が届いていることはディルクも屋敷の執事から聞いてはいたが、その中身までは知らされてなかった。
午後になって、ディルクは再び教会へと引き返すと、改めて祭壇に置かれた花束を手に取り、注意深く眺めた。それは五つの束に分かれており、古い束はすでに色あせ、枯れかけていた。どうやらその花束は毎日届けられていたようで、一番新しい束はまだ花弁がみずみずしかった。

城の庭ではあまり見かけない、町中の公園に生えてそうな平凡な野の花がなぜ……と、そこまで考えた時、ディルクの脳裏に浮かんだ名前があった。

――ハンナ姫か？

城内に咲いていないだろう花は、きっと森にでも出向いて摘んできたにちがいない。
大輪の薔薇や百合の中に紛れ、小さく咲いている素朴な草花……それはまるで話しで聞いた『ハナちゃん』のイメージそのものだった。

城の姫達は公務と称される時以外、外部の病人……例え親類縁者でも……を見舞うことは許されていない。ましてや姫君が自分に仕

える者の病気見舞いなど、とても許可が下りないだろう。

どんなにか、オイゲンの見舞いに行きたかったであろう。

その気持ちが、野の花に込められているかのようだ。

ディルクはしばらく無言で、控え目に横たわる小さな花束を見つめた。

式はつつがなく執り行われた。

身内と関係者のみ参列することになっていたとはいえ、教会の席はまばらに埋まるだけの、寂しく静かなものだった。

少ない列席者の中に、ディルクは初めてハンナ姫の姿を見た。

ハンナ姫は柱寄りの座席に、二人の従者にはさまれるような形で座っていた。

肩上で揃えられた黒髪からのぞく小さな顔は青ざめ、その表情は硬かった。王族特有のオーラも無く、しかも小柄なので人に紛れたら見失ってしまいそうな少女だった。

時折、従者にら話かけられている……おそらく大丈夫ですか、といった類だろう……が、ハンナ姫はかたく口を閉じたまま小さくうなずくか、微かに首を振るだけである。

やがて式も終わり、参列者のほとんどが去ってしまった後、式場は後片付けの業者のみとなった。

棺はすでに教会裏の墓に葬られ、きっといかにも初めからあったかのように周囲に溶け込んでいるはずだ……墓標だってどれも似通っていて、際立った特徴もないのだから。

人ひとり死ぬとは、何ともあっけないものだな……と、ディルクは冷めた気持で空っぽになった教会を見渡した。

オイゲンは生前人望も厚く、若いころは数々の王族に仕えたと聞く。

剣の腕もたち、周囲からは慕われていたという。

オイゲンの妻は早くに亡くなった上、子供も儲けなかったから、晩年は身内と呼べる親類縁者が少なかった。妻の死後は城内の騎士用宿舎へ移り、城内で雑務を手伝いながら静かな暮らしを送っていたそうだ。

そんな折、若い姫の専属に指名され、それから生き生きとした様子だったという。

ディルクがあんなに嫌がり、避けていた専属騎士の仕事……そこに彼は生きがいを見出していたとでもいうのか。

ディルクの帰路につこうとしていた足が再び、教会の裏庭から続く墓地へと向いてしまった。

どうしてだか、オイゲンにもう一度会いたいと思った。

……しかし、そこには先客がいた。

「……それでね、エポック先生が言うんだよ。これからはオイゲンがいないのだから、ひとりでもちゃんと勉強して立派な姫にならな

くちゃいけないって。そんなのわかっているのにねぇ」

墓標の前にいたのはハンナ姫だった。

ハンナ姫は喪服のドレスが汚れるのも構わず地面にひざまずき、真新しい石の墓標に真剣な表情で語りかけていた。

「立派な姫君になるから心配しなくていいよ。まずは食べ物の好き嫌いをなくさなくちゃいけないよね？　あと朝ねぼうを直して、クロッカスの鉢に水をやるのを忘れないこと。あっそれから王様ともっと打ち解けること……だけど、まだ『お父さん』なんて呼べないよ。お城に住んで三年経ったけど、まだ王様が私のお父さんなんて信じられないんだもん。でも仲良くやってくよ、うん」

そう言って喪服の姫君はえへへ、と笑ってみせたが、その表情は今にも泣きだしそうだとディルクは思った。

「オイゲンとはもう遊べないけどさ、リーザちゃんがいるからさみしくないよ。でも魚釣りは駄目だろうなぁ……リーザちゃん、あまり外で遊んだことないみたい。きっと餌の虫とか触れないよ」

風が出てきた。

「そうそう例のいちご畑、アレはまだオイゲンと二人だけの秘密だよ……いつか信用置ける人が現れたら、どこにあるのか教えてもいいけど……他にも、いろいろ……」

徐々にうなだれていくハンナ姫を、ディルクは物影からじっと見つめ続けた。

「……。……っ……、……」

ささやき声なのか、その言葉はディルクに届かない。
しかし彼女の胸の内が、木々の葉をさやかにゆらす夕暮れの風に乗って、震えるように伝わってくるように思えた。

さやさや、さやさや、と葉が揺れる音が増すにつれ、ハンナ姫の声が……すすり泣く声が、やさしくかき消されていく。

地面の上で両手をにぎりしめ、なにか言いながら涙を流すハンナ姫の姿がある。
彼女の聞こえない泣き声が、ディルクの脳裏に大きく響く。

その時カサッ、とディルクの真後ろで草を踏みしめる音が聞こえた。
はっとして振り向くと、数メートル離れた先に二人の従者が立っていた。おそらく物音をたてぬように近づいたのだろう……それでもディルクは不覚にも背後に気付かなかった自分に驚いた。

こんなにも目の前の出来事に心を奪われていた自分に、ディルクは少なからずショックを受けた。こんなことは騎士になってから初めてのことだった。

ディルクと目が合った二人の従者のうち、ひとりがそっと近づいてきた。
その顔には悲しげな微笑が浮かんでいた。

「申し訳ありません。式のあと、すぐにでも城へ戻るつもりだったのですが」
「いえ、気が済むまでいて下さって構いませんよ」

従者の男はハンナ姫の姿を見つめながら、やるせないように首をすくめてみせる。

「おいたわしい事です。姫様はオイゲン殿を、実の祖父のように慕っておいでした」

「……オイゲン殿は幸せ者ですね」

そう言ってディルクは振り返ると、ハンナ姫の小さな背中を見つめる。

「本当に……幸せ者です」

その時生まれて初めて、ディルクの胸の内にある思いが宿った。守ってあげたい、という強い気持ちだった。

◇　◇　◇

「そうそう、この道をずっとまっすぐ行くんだよ……あ、途中に大きな岩があるから、そこで右に曲がるの」

ある晴れた初春の朝、まぶしい新緑に包まれながら白馬が森を駆け抜けてゆく。

「もうじき湖に着きますよ」

たずなを引くのは黄金の髪をなびかせる、凛々しい横顔の若い騎士。

「えぇ！？　じゃあ行き過ぎちゃったかも。ちょっと止まって、いったん降りるから」

騎士の前に座る黒髪の少女は、馬のたてがみにしがみついたまま肩越しに騎士に振りかえる。すると騎士は秀麗な顔を少しだけしかめてみせた。

「先ほどからこの辺はすでに何周もしてますよ。いい加減どこへ行くのかくらい教えて下さい」

「秘密だって言ったじゃん……でもおかしいな、この辺のはずなのに……」

むずかしい顔をして腕を組む姫の様子に、騎士はこっそり苦笑をもらす。

「姫様、少し休憩にしませんか。お昼にしましょう」

ディルクはヒラリと馬上から飛び降りると、ハンナ姫が文句を言う前にさっさと手を伸ばして小さな体を地上に降ろした。

ハンナ姫は何でもひとりでやりたがるので馬の乗り降りも自分でできると言い張るのだが、ディルクはその言葉を受け付けようとしない。ハンナが危なっかしく馬から飛び降りるところを、何度もその目で目撃しているからだ。

「せっかく、お昼のデザートにいちご食べようと思ったのに……」
「いちごが食べたかったのですか？　出かける前におっしゃってくださったなら、厨房に頼んで用意させたのですが……」
「そうじゃなくって、現地調達する予定だったの……よし、きっとこっちだ」

そう言ってクルリと向きを変えると、ハンナは梢（こずえ）をかき分け、ひとり森林の中を歩き出す。

「姫様、お待ちください」
「あ、思い出した！　こっちだこっち……ディルク早く早く！　すっごいよ、一面いちごだらけなんだよ！　オイゲンとね、二人で見つけたんだよ……懐かしいなぁ……ホント懐かしいなぁ……」

ハンナ姫は、笑顔で騎士に振りかえった。
その瞳には懐かしさであふれているが、憂いはない。

――いつでも、あなたが笑っていられますよう……私がお守りします。

騎士は一度青空を振り仰ぐと、改めて心に誓ったのだった。

（おわり）

（1）

夏。

夏がきた。

川遊び、キャンプ、虫取り、天体観測。

わくわくすることがいっぱい。

――のはずが。

「アリュスの国ぃ！？」

「出発は一週間後、移動と滞在を含め四週間の予定となっております。片道十日の道程ですから、あちらの国では正味八日間の滞在となります」

目の前で分厚い書類の束をめくるのは、三ヶ月ほど前に私の専属となった騎士ディルク。暑い季節もなんのその、長そでの騎士装束をきっちり着こみ、騎士の誉であろう最高ランクの証である黒いサッシュを腰に巻いたその立ち姿は、城内でも指折りの眉目秀麗な理想の騎士様……って噂なんだけど、その実体は堅物で口うるさくて無愛想で、怒るとブリザードのように怖い人だ。

「アリュスって北の国じゃん……」

「はい」

「すっごく寒いんじゃ……」

「常冬ですから」

私はガックリ、と座っていたイスの背もたれに身を沈め、部屋の隅に鎮座するクローゼットをうらめしそうに眺めた。あそこには夏

の遊び着がたくさん入っている……昨日、女官のニナさんにお願いして衣替えをすませたばかりだっていうのに。

私の視線に気がついた騎士様は「ああ」と、実にさりげなーく（ここがにくたらしいところよ）とんでもない事を口にした。

「姫様の夏物のドレスはすべて処分しておきました」

「えっ！？　な、なんでっ！？」

「布地もすり切れていたり穴があいていたりと、相当痛んでましたので。去年の夏どれだけ外で遊んだのですか、あなたは」

――毎日外で遊んでましたがなにか？

「大体、あの服は今の姫様にはサイズが合いませんよ」

「……私、太ってないもん」

「身長が伸びた、と申し上げているのです。姫様はまだ成長期ですから、手足の長さも去年と比べてだいぶ変られたはずです」

そう言われてしまうと反論のしようがないじゃないの。

私はしぶしぶ納得して、それから手渡された書類に視線を落とした。

――『公務』かぁ。

十五の春を迎えた王族は『公務』と呼ばれる仕事を始める。

今年の春前に誕生日を迎えた私ももれなく『公務』を始めることになった。一口に『公務』と言ってもいろいろあるのだけど、たとえば国内のあちこちで開かれるイベントに顔を出したり、外国のお客様にごあいさつしたり、今の私の『公務』はそんなところだ。

でも今回の『公務』は諸外国へ訪問するといった大掛かりなもの。こういう『公務』って、フツー正室の姫や王子が行うレベルなのに、どうして私のような末端王族に振られたんだろう？

「ディルク様と一緒だから、でしょ」

ベッドの縁に腰かけてたリーザちゃんは、あっけらかんと言い放った。

隣に座る私は枕を抱えてうなだれる……なんでここでディルクが出てくるんだろう？　ところでこの枕カバー、初めて見るな……。

「あ、それ新作なの。枕カバー」

「へえ、カワイイね」

「ハナちゃんにも同じの作ってあげよっか」

リーザちゃんの部屋には、彼女の趣味である刺繍が施されたクッションカバーや枕カバーがあふれかえってる。とっても上手なんだけど、自然素材にこだわるリーザちゃんの作品は大抵渋い色合いで、レースとお花模様のシーツに沙羅織のカーテンが幾重にも重なった豪華な天蓋付きベッドには完全にミスマッチだ。

「今夜は夜通しおしゃべりできるわね」

「そんなこと言ってリーザちゃん、明かり消すとすぐ寝ちゃうクセに」

今夜は久しぶりにリーザちゃんの部屋へお泊りにきていた。
リーザちゃんはたくさんのリボンをつけた茶色の巻き毛に、レース飾りのついたナイトキャップをかぶせようとしているところ。頭にいろいろくっつけて大変そうだなぁ、って感心してながめていたら、リーザちゃんが私の頭を見てため息をついた。

「いいなぁ、ハナちゃんは髪が短くて」
「リーザちゃんも切ってみる？」
「無理よ、クラウスがゆるしてくれっこないもの。一度ためそうとしたら鬼のように反対されちゃったわよ」

ぎゅっぎゅ、とリーザちゃんはわりと乱暴な手つきで無理やりナイトキャップにあふれるような巻き毛を押しこんだ……たしかにクラウスさんの気持ちは分からなくもない。こんな見事な巻き毛を切り落とすなんてもったいないもの。

クラウスさんはリーザちゃんの騎士で、いつも明るくって楽しい……平たく（悪く？）言えば、軽い感じの騎士だ。そんなクラウスさんが『鬼のように反対』なんて想像つかないなぁ。よっぽど髪を切る案がイヤだったのか。

「でもハナちゃん、これから寒い国に行くんだから、なにもこんなに短く切らなくてもよかったのに」
「だってコレ、不可抗力だもん……」

私は襟足までのすっかりショートになった黒髪をなで、やれやれとため息をついた。
実は先日お城の厨房へ行った時、かまどの火で髪のはしっこを焦がしちゃったのだ。

その日、新米メイドさんが初仕事で緊張のあまり、かまどの火加減をしくじったらしい。
そこにたまたま居合わせた（実はこっそりおやつを取りに来た）私は、暴走しかけてた火を止めるのを手伝ったのだ。

なんとかボヤさわぎになる前に食いとめたけど、料理番のコックさんはえらい剣幕で怒鳴りだすし、私が髪を焦がしちゃったもんだから新米メイドさんは泣いてあやまりだすし、さらにディルクに見つかって「やけどしたらどうするんですか！」ってお説教されるしで散々な目にあった。

でも私からもなんとか頼み込んで、今回の件は女中頭のマーニャさんには秘密にしとくってコックさんもディルクも約束をしてくれたんだ。厳しいって評判のマーニャさんに新米メイドさんが叱られなくてすんだことだし、とりあえずよかった。

「焦げて切り落とした長さにそろえたら、だいぶショートになっちゃったんだ」
「ハナちゃんショートヘア似合うよ。可愛いからいいじゃない」
「でもこの頭で雪国での公務は寒そうだなぁ……なんか行きたくなくなってきちゃった」
「もともと行きたくなかったんでしょ？」

クスクス笑うリーザちゃんと、大きな天蓋付きベッドに二人でもぐりこむ。
扉の方から「お休みなさいませ」と女官のリリアさんの声が聞こえ、次の瞬間パチンと電気が落とされた。暗闇の中から、リーザちゃんの小さなささやき声が聞こえてくる。
「ディルク様が専属騎士になったのが運のつき、とあきらめなさい

な」
「ディルクが専属になったからって、どうして公務が増えちゃうんだろう……」
「だってディルク様は、これまで他国との外交の場で活躍してきたのよ。やっぱりよその国のお姫様にも人気あるんじゃないの？　さしずめプリンセス・キラーってところかしら？」
「うっわー、そう言うとまるで、ディルクがめちゃめちゃ女たらしっぽく聞こえる」

私の軽口に、リーザちゃんは月明りの中でむっとする。

「ちがうわよ、ディルク様は硬派な騎士様なんだからね」
「はいはい……」

なぜかリーザちゃんを含め、ディルクのことを『様』とつけて呼ぶ姫が多い。
人気者の騎士様だから、あこがれている姫君らの間でそう呼ぶことが定着してるようだ。

――『ディルク様』って外国でも人気あるんだ……たいしたもんだなぁ。

つまり今回の『公務』は、姫である私を招待するのは建前、実際招きたいのはディルクってことか。
外交の職務を離れたディルクを、理由無しにそうそう招待できないから、ディルクが仕える姫である私の出番だってこと。要は私を呼べば、もれなくディルクがついてくる。

――ようするに私はオマケか……この際はっきり言っちゃうと。

それにしても四週間もだなんて長すぎる！
はたして今年の『夏』を満喫できるのだろうか？　せっかくエポック先生が二ヶ月の夏休みをくれたのに……まぁ、宿題は出されたケド。

ちょっぴりブルーになった私を、隣のリーザちゃんが楽しそうに「ねえねえ」と肩でつついた。

「アリュスの国の王宮は、まるでおとぎばなしのように綺麗だって聞いたことがあるわ」
「……おとぎばなし？」
「雪と氷でできた、幻想的なお城だそうよ。いいなぁハナちゃん」
「……」

――できることならリーザちゃんに代わってもらいたいよ。

夏の太陽を心待ちにしていた私は、目を閉じながらこっそり心の中で嘆いたのだった。

（2）

アリュス国までの道程は、ホント遠かった。
馬車に乗ること自体はそれほど苦痛じゃないけれど、何しろ乗っている時間が長すぎる。

――やっぱ何度も休憩が入るから、時間かかるんだろうなぁ。

どうやら私の身体を気づかって、ゆっくりした移動日程を組んでくれたみたいだ。
ディルクの話によると、すべては王様の指示らしい。

「でも馬車に乗るのは嫌いじゃないよ？　昔、家族みんなで馬車旅行したことあったなぁ……」

それまで窓の景色を眺めていた私は同乗するディルクに振り返ると、つい懐かしい思い出話を口にしていた。

「馬車でゴトゴト、半日ゆられっぱなしでね。さすがに私も馬車酔いしちゃったよ。でも不思議と馬車を降りたとたん具合が良くなるんだよね」
「乗り物酔いは概してそのようですね。今回はこまめに休憩を取るつもりですが、少しでもご気分がすぐれないようでしたらすぐにおっしゃって下さい」

私の真向かいに座るディルクは真面目な口調でそう言った。
相変わらず無愛想な顔してるけど、さすがに最近では慣れてきたせいか、微妙な雰囲気とか表情の変化を読み取れるようになっている自分に気づく。

ディルクの閉じられた口元は微かにゆるみ、緑の瞳がふんわりと柔らかい……これはわりと機嫌がいいしるしだ。逆に機嫌が悪いと目つきがやったら鋭くなるし、口元もぎゅって引きしまるもん。

やがて休憩時間になり、いったん馬車をとめて外に出た。

冷たい風が吹きつけてブルリと身震いする。もうアリュスの国境近くだそうだから、きっと気候もアリュスのものに近いに違いない。

――うわぁ、息する空気も冷たいよ……。

昨日まで半そででも平気だったのに、さすが常冬の北国。

妙に感心しつつ寒さに首をすくめていると、後ろからフワリと柔らかいものが触れた。振り向くといつの間にかディルクが立っていて、大きなショールを手にしていた。

「これで首元を覆ってください」

「あ、ありがと」

白く光沢のある生地は、薄いのにとても暖かくて肌ざわりも良い。

手触りを確かめていたら、正面に回ってきたディルクの手によってさっさと巻きつけられた。頬に触れる生地がくすぐったくて、なんだか笑いがこみあげる。

「あったかいよ」

無口な騎士様は黙ったまま、しかし満足そうな様子で小さくにうなずいた。

その日の夜は、アリュスの国境付近にある小さな町に滞在することになった。

仮にも『公務』ということで、馬車もそれなりに華美な上、護衛やお付きの人たちも結構いる。お城からやってきた一行ということは、やはりというか当然町の人たちにはバレバレだった。

「姫様、本日の宿泊先はこちらになります」
「はあー……」

馬車から降りると、目の前に大きなお屋敷がそびえ立っていた。
ディルクの説明によると、ここは王族関係者が利用している別荘のひとつらしい。

今回の私みたいに公務で国境越えする際、宿泊施設として利用する場所だそうで、こんな別荘が国境付近にはいくつもあるみたい。

「立派なお屋敷だなぁ……でも私が泊まっていいの？」
「？　当たり前でしょう」

なにを馬鹿なことを、と言った風にディルクは眉を寄せた。
つい三年前まで町で暮らしていたれっきとした町育ちの私は、いまだに自分が王族って実感がないから、時々思わずこんなことを口にしてしまうのだ。

それをうちの騎士様は大変嫌っている……王族の自覚がなくってホント申し訳ないけど、体にしみこんじゃってる庶民感覚はどうし

ようもない。

屋敷に一歩足を踏み入れると、掃除が行き届いている磨かれた室内に感嘆のため息がもれた。

すごいなぁ、こんな立派な宿屋さん泊まったことないよ。

しかも案内されたお風呂がやたら広い。

案内の女の人に「ゆっくりと旅の疲れを癒して下さい」なんて言われたけど、たった一人で使うには気の引ける規模。おまけに良い香りするお花まで浮いてるしさ……贅沢過ぎじゃないかなぁ、これ一人で入るのって。

でも使わないとせっかくのお湯がもったいない。

ただ、まだ日もあるし、今からお風呂入っちゃったら町へ出れない。お風呂入ったら最後、外へ出たくても「湯ざめするからいけません」って絶対ディルクに止められるにきまってる。

普段お城にいる時だって、お風呂上がりはバルコニーにすら出させてもらえないもん。「お風邪を召したらどうするんですか」って言うけれど、私そんなやわな身体じゃないんだけどなぁ。

それはともかくお風呂は夜のお楽しみということにして、今は町へ出かけたい。せっかくだもん、少しは一人で自由に探索してみたいよ。

――でもあのお堅いディルクが許してくれるかなぁ……ひとりで散歩なんて。

半分ダメ元でディルクに聞いてみたら、意外にも二つ返事でオーケーをくれた。

ごくごく小さな田舎町だし、お城からついてきた護衛の人たちが町中いたるところで警備してくれてるので、とりあえず安全と考えたのだろうか。「ほんの少しの間だけなら」というディルクの念押しの後、私は町での一人歩きを許された。

こうして出かけたのだけど……道を歩いていると、数メートルごとに護衛の人とすれちがう。その度に会釈されたり笑顔を向けられた。

――なるほど、一人なようで一人じゃないよなコレ。まぁ隣で監視されるよりマシか……。

それにしても、こんな風にひとりで町を歩くのはすっごく久しぶりだ。

しかも初めて来た町だから、あちこち目移りしてきょろきょろと挙動不審になってしまう。

迷いに迷って、ようやく一軒の雑貨屋さんに入ってみることにした。

短い時間しか許されてないから全部の店は見れないだろうし、せっかくお小遣いも少し持ってきたのだから旅の記念になるような何かを買いたかった。

「いらっしゃいませ」

ドアベルとともに聞こえてきた若い女の人の声に、私はドキドキしながら店内に足を踏み入れた。

――ホント久しぶりだ、こういうお買いもの……お城上がって以来じゃないかな。

小さな店内には商品が所せましと陳列しており、普段見ないような民芸品に目を奪われる。どれも手作り感いっぱいで温かみがあって、しかも私のお小遣いでも十分買えそうなかわいらしい物ばかりだ。

夢中になってあれこれ見てたら、お店のお姉さんがやってきていろいろ説明してくれた。

「これは最近入荷したばかりなのよ。西の都からだから、まだアリュスの王都にも入ってないわ」

「へえ、きれいですねー」

「もうすぐ雪の祭典だからね。それをイメージして作られたのよ」

雪の祭典なら、私も出席する予定になっている。

たしか今回の公務の中でも、一番大きなイベントになってたんじゃなかったかな？　なんでもアリュスの初雪を祝う伝統的なお祭りらしいんだよね。

そういやアリュスの国には確か、今年十二になるお姫様がいるって言ってたっけ……これ、そのお姫様のお土産になるかも。

「じゃあ、これ下さい。あ、贈り物にするんでリボンかけてくれますか？」

「ええ、もちろんよ」

ちょっと待っててね、とカウンターの後ろにまわって包んでもらっている間、今度は自分へのお土産になりそうなものはないかと棚の上を物色していると、店の扉が開いて別の来客を告げた。

「げっ……」

扉の前にはごていねいに帯刀した、田舎の雑貨屋さんに不釣り合いな完璧な騎士姿のディルクが立っていた。あーあ、お店の人もきょとんとしちゃってるよ……。

「お迎えにあがりました」

「あー……そうなの」

――まだ買い物始めたばかりだったのに。

ガッカリする私に、怜悧なオーラを漂わせた騎士様は「日が暮れる前に戻りましょう」と有無を言わさず私の手をしっかり取った。

お店のお姉さんは「えっ、もしかしてうわさのお姫様……」とつぶやいた。そうなんです、そうは見えないんですが残念ながら……。

私は後ろ髪引かれる思いで店を出た。

だって、まだ私自身のお土産買ってなかったんだよ……とほほ。

（3）

翌日の昼頃、私たち一行はアリュスの王都の外れに到着した。
アリュスはうわさ通りすごく寒い所で、防寒着なしじゃ外を歩けない……はずなのに。

「なーんで皆、普通のかっこうしてられんの！？」

にぎやかな町中では上着一枚とか、私の国じゃ春先ぐらいの軽装で歩く人達であふれてかえっていた。
これじゃ毛皮のコートにショール、耳までスッポリおおう帽子までかぶって完全防備してる私が異様に見えるじゃん……。

「アリュスの民は我々と違って、寒さに強い遺伝子を持っているのです」

そう説明するディルクも、いつもの騎士装束に分厚いマントを一枚羽織っただけ。寒くないのかなぁ？
気になってたずねてみると、クールな騎士様はあっさり「鍛えてますから」と即答した。そーゆーもんなんだ……？

とにかく、まだ王宮まで道のりがある。
この町で昼食をとることになった私たちは、護衛の人たちには休憩がてら各々自由に食事してもらうことでひとまず解散した。

当然、私はディルクと一緒だ。
いくら王都に入ったとはいえ護衛もいないことだし、私達は身分をふせてレストランへ向かうことにする。

「どこも混んでますね」
「お昼時だしねぇ……でもあんまり空いている店もね。どうせ並ぶなら、おいしいって評判の人気店で食べたいなぁ」

そんなわけで、一軒の流行ってそうな店に入ることにした。
店の外には順番待ちのベンチが設けられ、数組の家族連れやカップルが楽しそうにおしゃべりしながら行儀よく順番を呼ばれるのを待っている。

私たちが列の最後尾につくと、店の人にメニューを渡された。「30分ほどでご案内できますから」と愛想良く言われ、まあ寒いけど我慢することにする。メニューを片手に小さくくしゃみをすると、隣で私の風除けをするように立ってくれていたディルクが「大丈夫ですか」と眉をひそめた。

「なにか体の温まる飲み物でも買ってきます。ここを動かないでくださいね」

ディルクは一言念を押すと、近くの飲み物のスタンドへ向かった。ひとりその場に残された私は、さっそくメニューを開く。

――よし、ディルクが帰ってくるまでに何を注文するか考えておこう。

メニューはアリュス語と、この大陸の共通語の両方で書かれていた。共通語なら読めるけど、料理の写真が載ってないからイマイチ想像つかない……食材の名前とか、知らない言葉もたくさんあるしなぁ。

「君、異国からきた人？」

流暢な共通語で話しかけられ、私はメニューから顔を上げた。
そこには肩まで伸ばした銀色の髪がまぶしい、ものすごい美人がニコニコと私の顔をのぞいている。

「そんな格好で寒そうにしてるから、すぐに分かったよ。この国は初めて？」
「はい」
「この店のランチは美味しいよ。どれにするか決めた？」

そこで私はえへへ、と笑って広げていたメニューを持ち上げてみせた。

「これ、共通語で書かれているから読めなくもないんですが……どれがいいのかさっぱり、です」
「じゃあ僕が選んであげるよ。好き嫌いとかある？」
「特に無いです」
「じゃあこのスープとシカ肉のセットなんかいいよ。ちょっとスパイシーだけど身体があたたまるしね」

……遅ればせながら私は、そこで初めて目の前の麗人が男性だということに気がついたのだった。

銀色の毛先だけがふわん、と柔らかく巻かれていて、とってもきれい。
ぼんやりその顔をながめていたら、ふとその表情が「そうだ」と何か思いついたように変わり、綺麗な刺繍が施された上着のポケットからなにやらゴソゴソと取り出した。

「これはお近づきのしるし」

その麗人は、私の手のひらに小さな包みを押しつけた。

「じゃ、またね」

そして現れたのと同じくらい、その人は唐突に列から離れると足早に去っていってしまった。

あれ、ランチの順番待ってたんじゃなかったの？　それともただ道を歩いてて、困ってそうな私に親切に声を掛けてくれたんだろうか？

ふと手のひらを見ると、薄紙に包まれたチョコレートがひとつ。はしっこをかじってみたら、口中に香ばしいキャラメルの香りが広がった。なにコレ、おいしいじゃないの。

「お待たせしました……それは？」

顔を上げてると、そこには湯気の立つ飲み物を手にしたディルクの姿があった。

その視線は、私の手元に注がれている。

「あ、ディルク。いや実はね……」

簡単に事情を説明して、最後に手の中のチョコレートの包みを見せた。

そしたらディルクに怒られた。

「知らない人から物をもらってはいけません。しかも食べてしまったとは……！」

残りのチョコレートは没収、さらにお説教というオマケまでついてきた。
くどくど叱られるのを殊勝げに聞いてるふりをしつつ、私の頭の中はスパイシーなシカの肉とスープでいっぱいだった。
――ああ、お腹ペコペコ……早く順番呼ばれないかなぁ。

ようやく王宮に到着したのは、日も暮れようとした頃だった。
実際はもっと早くに外門をくぐったのだけど、いろいろ入城の手続きをしたり、また門から王宮の建物の入り口まで離れていたこともあって、かなり時間を食ってしまったのだ。

「厳重な警備だなぁ」
「王宮ですからね。姫様はご存じないかもしれませんが、我が国も外国からの客人を招く際は入念なチェックを怠りませんよ。それに一目でそれと分かる警備隊の他に、私服で警備している者が城内には多数おります」

なんと、そうやってお城の平和と秩序が保たれていたとは！
よく考えると、騎士制度だって王族を守るために必須ってなってるしね。私たち王族って、結構厳重に守られているものなんだなぁ。
――ディルクにも苦労をかけてるんだなぁ。
私は思わず隣を歩くディルクの腕を、日頃のねぎらいの意味をこ

めてポンポンと軽く叩いた。叩かれた本人は怪訝な顔をしてたけど。

そんな事をしているうちに、やがて謁見（えっけん）の間に通された。

王宮の外観からしてそうだったけど、室内もガラス張りで出来てるみたいに透明な家具や装飾品であふれていた。聞くところによると、これはガラスではなくてアリュス特産の珍しい透明な大理石なんだって。

光が差し込むと、部屋中がキラキラとプリズムを作ってきれい。

リーザちゃんが話してたみたいに、確かにおとぎばなしに出てくるようなお城だよ。

「ようこそいらっしゃいました、ハンナ姫」

奥の間から現れたのは、光沢のあるドレスを身にまとったアリュスの女王様だった。

このアリュス国は女王制で、男の国王様は存在しないのだ。

女王様は長い銀色の髪を高く結いあげて、てっぺんに星粒みたいに輝く石でできたティアラをつけていた。長いまつ毛も銀色で、それがミステリアスな灰色の目と相まって不思議な雰囲気をかもしだしている。

――なんか氷の王宮にぴったりの、神秘的な感じの人だなぁ。

そんな女王様の後ろから顔をのぞかせたのは、小さな女の子だった。

「こちらは娘のコルティですわ。コルティ、ごあいさつを」

「はじめまして、ハンナ姫様」

目元がお母さんとそっくり……この子も神秘的な感じに育ちそう。銀色の髪は二つに分けて耳の横でまとめ、小さな髪飾りをつけている。

「さあて、女の子たちには隣の広間にお茶とお菓子を用意してありますよ。コルティ、ハンナ姫を連れてらっしゃいな……手はきちんと洗うのですよ」

「はあい、お母様」

さあ行きましょう、とコルティ姫に促され、私は隣のディルクを見上げる。

ディルクは女王様とまだお話があるらしく「後で私も参りますから」と言ったので、私はひとまずコルティ姫と一緒に隣の部屋でお茶をいただくことにした。

廊下に出ると、並んで歩いていたコルティ姫がちらり、と私を見やった。

まだこの状況に慣れてない私は、ちょっと緊張しつつも笑いかけてみるが……あれ、なんだかそっぽ向かれちゃった。

――向こうも緊張してるのかな？

お互い無言で廊下を歩き、やがてコルティ姫の後に続いて隣の部屋に入ると、中から焼きたてのお菓子の甘い香りがした。

「どうぞ、ここに座って」

「うん……」

二つしかない席の片方を指さされ、私はぎくしゃくとテーブルに

着く。
なんだか妙に緊張する……何か話した方がいいのかな。
「あのう」
「何？」
じいっ、と例の神秘的な瞳で見られ、ついもごもごと口ごもってしまう。
すると……。
「……つまーんない子」
「は？」
え、え？　今『つまーんない子』とか言われた？
ぼう然とする私の隣で、コルティ姫はさっさと自分の分のお茶をポットから注いでる。
「あの、コルティ姫様？」
コルティ姫はしらんぷりしたまま、お菓子に手をのばした。
そしてひとりもぐもぐと食べ始めてる。
――えー……困ったな。
こんな時どうしたらいいか分からないよ。
今までリーザちゃん以外のお姫様たちと顔合わせる機会ってあんまりなかったしなぁ。
仕方ないのでおずおずとポットを拝借して、とりあえず自分のカップにお茶を注ぐ。

沈黙の中あまり食欲もないけど、同じく真似をしてお菓子に手を伸ばそうとした時……控え目なノックの音が聞こえた。コルティ姫の「はい」という声に扉が開かれ、ディルクが部屋に入ってきた。

――た、助かった……。

「おくつろぎの所おじゃまして申し訳ありません」

「いいえ、ちっとも。今からハンナ姫様に旅のご様子をうかがうところでしたの。ね、ハンナ姫様？」

先ほどとは打って変わって、にっこり愛嬌のある笑顔を向けるコルティ姫に、私は目を丸くしてしまう。

「わたくし、姫様とお会いするのがとても楽しみでしたの」

「はあ……」

「仲良くしてくださるかしら？」

長いまつ毛をぱちぱちさせて、コルティ姫が無邪気に問いかける。私は混乱する頭で、それでも何とか「はあ、もちろんです」と返事をしたのだった。

女王様との謁見も終わり、客室へ案内されようやくホッとした。座り心地の良いソファーに腰を落ち着けた途端、ふいにディルクが切り出した。

「先ほどはコルティ姫とどうされました？」

「は？」
「姫様のご様子が、いつもとは少々違って見受けられましたので」
あの微妙な空気を読みとったのか……さすがするどい。でも様子が変だったのは私じゃなくって、むしろあの姫の方なんだけど。
ディルクは腕を組んだまま、私の説明を辛抱強く待っている。
うーん……でもさ、あんな細かいことといちいち話すのもなぁ。コルティ姫はまだ十二歳だし、たまたま虫の居所が悪かったって可能性もあるし……。
「姫様？」
「……うん。まあ、とにかくここに座りなよ」
私が示したソファーの隣にディルクはためらいがちに腰をおろすと、小さくため息をついた。
「王族の中には気ままな方も多いですからね……姫様も無理して仲良くされなくても構いませんよ」
「え、そーゆーもんなの？」
「向こうに打ち解ける気がなければ、努力しても結局は徒労に終わるだけでしょう」
めずらしく寛大な意見……私がまじまじとディルクの顔を見ると、弓なりな眉が微かに持ち上がった。
「なんですか、人の顔をジロジロと」
「いやあ、めずらしい事もあるもんだなぁって」
――やさしいぞ、ディルク……ちょっとジンときた。

「なんのことですか？」
「いやいや……それはそうと、今夜は何に着替えればいいの？　たしか晩餐会みたいなのがあるんだよね？」
「みたいな、ではなく晩餐会です。姫様の歓迎会でもありますので、規模もそれなりでしょう。ダンスもありますから、あまり引きずらない程度のドレスを着用して下さい」
「ふあーい」

やれやれ、ダンスかい。

「踊りはきらいじゃないけど、社交ダンスはイマイチ苦手なんだよなぁ」

そう私がぼやくと、ディルクの身体の動きが一瞬固まった（ような気がした）。

「姫様……ダンスは大丈夫ですよね？」
「え？　どのダンス？」

な、なんだ？　ディルクの顔からどんどん表情がなくなっていくよーな……？

「最後にダンスの練習をされたのはいつですか」
「えーと、お城にあがったときに少しやっただけだから……三年前くらい？」

はーっ、と大きくため息をつき、がっくりと頭を垂れたディルクに私は内心冷や汗をかいた。
もしかして踊れないのって、すっごくマズイことなのではっ！？

「あ、あのぅ、ごめんディルク……」
「……いえ、姫様の責任ではありません。確認を怠った私のミスです」
「どうしよう、今夜の晩餐会、どうしても踊らなきゃだめ？」
「ご心配なく。私から『姫様は足首を痛められてて踊れない』とでも申し上げておきます」
「そ、そっか」

とりあえずセーフ？かな。
胸をなでおろす私のかたわらで、ディルクの不吉な声が。

「……帰国したらまず、ダンスの特訓ですね」

（4）

晩餐会のための仕度が始まった。

久々にドレスを着るといろいろ大変だ。

姿見の前に映る自分の姿に、私は内心『やっちゃった』とため息を漏らした。

まず肌焼き過ぎちゃった。

最近暇さえあれば魚釣りに出かけてたからなぁ……夏前なのに腕なんか妙にこんがりしちゃってる。しかも半そでのあとがくっきり。

それから髪形。これはもーどうしようもない。

ここまで切っちゃうとごまかしようも無いしね……ドレスとかなりにアンバランス。

「姫様、お仕度は整いましたか」

そう言って隣の部屋から颯爽と現れたのは、華麗な騎士装束姿のディルクだ。

「どうされました？」

「いやあ、すっごくキマッてるなぁって思ってね」

あきれ顔の騎士様は、それでもやっぱりカッコイイ。

シルクの黒い上下には所々渋めの金糸で細かい刺繍が施されており、豪華だけど悪目立ちしないし嫌味がない感じ。金色の長い髪は細い金のリボンできっちりまとめられ、整った顔立ちをいっそう際立たせている。仕上げには、騎士の中でも最高位の証である黒サッ

シュがふわりとなびかせるように腰に巻かれ、まさに非の打ちどころがない。

――どーみてもディルクの方が王族に見えるなぁ。

最近は王子様たちの間でも「カッコイイから」という理由で騎士装束を公式な場で着るのが流行ってるのだ。ただディルクは、王子にしては不自然なくらい大振りな剣を帯刀してるから、かろうじて騎士だって分かる。

――ま、うちの騎士様ほどカンペキに騎士装束を着こなせる王子なんていないだろーけどね。

ちょっと自慢したい気分だ。

そんなディルクは「イヤリングを着け忘れていますよ」と、鏡台の上の宝石箱を手に取り、ふたを開けて私に差し出した。

「……それ、やっぱりつけなきゃダメ？」

「国王様からの贈り物でしょう？」

しずく型した大粒のブルートパーズをかざされ、私は「ちぇっ」と眉を寄せてみせた。

だって重そうなんだもん……それにドレスには合うだろうけど、肝心の本人には合わないよ。それでも有無を言わせずディルクの手によってイヤリングをつけられてしまった。

ああ、ウエストのリボンはぎゅうぎゅうしめつけて苦しいし、ヒジまであるレースの手袋はごそごそして気持ち悪いし、ホント軽い拷問だよ。

それでも「どうよ？」とディルクに感想を求めたら、無愛想に「それでよろしいですよ」と一言。
なんだか聞いて損した気分だ……。

晩餐会は一階にある『舞踏の間』という部屋と、それに続く大広間みたいな場所を二部屋ぶち抜きで行われた。

アリュスの王族と、ごく限られた貴族の面々のみの内輪な会だとかいうけど、かなりの大人数。
ただし気楽な感じに、という配慮があるのか完全立食形式で自由なムード。オーケストラも入っての賑やかで軽快なダンスが繰り広げられていた。

……でも踊れない私は完全に浮いてる。

ディルクは以前外交関係の任務についていたから仕事上の知り合いも多いらしく、そういった関係者の皆様にごあいさつするので忙しい。なるたけ私のそばに居ようとしてくれるけど、そもそもこの訪問では私がオマケみたいなもんだし、気を使われるとかえって落ち着かないんだよなぁ。

「大人しくここにいるから、いってきなよ」
「……ではすぐ戻ってまいりますから、ここから絶対に動かないでください」

ディルクは念を押すと、グラマーな女の人の手を取って向こうへ

いっちゃった。
仕事関係？　あれが？　ふーん、へー、ほー……楽しそうでよござんしたね、まったく。
いいもんね、私にはここにお皿いっぱいのごちそうがあるもんね。
あーこの肉おいしーわ。
「また会ったね、壁のお花さん」
顔を上げると見知った姿……銀色の髪に水色の瞳、女性と見まごう綺麗な顔……昼間に町のレストランの前で会った人だ！
昼間とは違う服装で、なんだか王子様みたいな格好している。
あれ、もしかしてこの人、王族だったりする？
「どうして踊らないの？」
「……踊らないんじゃなくて、踊れないんだもん」
そこで言葉を切った私は、少し迷って、でも本当のことをこっそり耳打ちした。
「実はダンス苦手なの」
「あはは、僕と同じだ」
隣の椅子に座った彼は、親しみやすい笑顔を向けてくる。
仲間だ、仲間。なんかうれしいな。まったくの初対面じゃないし、実は一人でちょっと心細かったんだよね。
「あなたも王族の人？」
「まあ一応ね。君も会ったと思うけど、コルティの兄だよ。名はフ

リード」

――え、あのお姫様の……？

「父は違うから、半分しか血はつながってないけどね」

「そっかぁ」

『道理で』という言葉を飲み込んだ私。

やはり血が半分しかつながってないと、兄妹とはいえそっくりになるとは限らないようだ。だって同じ銀色の髪をしているけど、顔は似ても似つかない。性格も、だけど。

「ところで……いつまでもここで壁のお花さんしててもつまんなくない？　ちょっと外の空気吸いに行こうよ。夜にしか咲かない、めずらしいお花を見せてあげる」

「そうしたいけど……」

ディルクに怒られる。

それが真っ先に私の頭に浮かんだ。

「ここに居るよう、コワイ連れに言われちゃっててて」

「そうなんだ……なんか大変そうだね」

――そうそう、大変なんですよ。

「壁の花でもいーんです、どうせ『ハナ』ちゃんだし」

「ハナちゃん？」

「どっか東の異国の言葉で、お花って意味らしいんです。私のあだ名なの」

「へえ、ハナちゃんか。僕もそう呼んでいい？」

「うん」
「東洋の花なら、たしかサンルームの温室にあったな……」
――へえ……ちょっと見てみたいかも。
ちょこっとぐらいなら抜け出しても大丈夫かな。
フリード王子に頼んでみると、快く案内してくれると言う。
「例の怖いお連れさんは大丈夫なの？」
「うん、すぐに戻ってくれれば平気」
バレる前に戻ればいい、そう思った私は気軽な気持ちで席を立った。

（5）

賑やかな広間をぬけて廊下に出ると、意外にもあちこちに人の姿があった。

酔いざましにぶらぶら歩いている人や、ダンス疲れか靴を脱いで足をさすっている人など、それぞれの理由で会場を抜け出した様子である。

フリード王子に連れられてサンルームに入ると、そこでは数人のお年寄りグループが小さな円卓囲んでのんびりとお茶を楽しんでいた。

「ほお、あなたが今夜の主賓の姫君とな」

「まだお若いのに公務なんて立派ねぇ」

「ほら、こっちのチョコレートもお上がんなさいな」

――――絶対、子供に見られてるよな私……。

民族の違いか、この国の人は平均してやたら背が高い。しかも顔の作りも大人っぽいから下手するとコルティ姫より若く思われてるかもしれない。

とにかくテーブルに招きよせられた私達はいろんなお菓子を押し付けられた。

もっとお茶を飲んで行け、と強くすすめられたけど、ディルクに黙って抜け出してきた手前あまりゆっくりもしてられない。

「ごちそうさまでした」とお礼を言ってテーブルを離れるまで、かたわらのフリード王子はなにが可笑しいのかクスクス笑いっぱな

しだった。

「さ、こっちだよ。おいで」

王子は私の手を取り、奥の温室へ案内してくれた。

いろんな植物の間を練り歩くことしばし、やがてひとつの植物の前で足を止めた。

「ほら、これが東の国から献上された花だよ」

王子が指示した花に、私はあっけに取られた。

「え……これ？」

節くれだった緑の不思議な幹からシャープな葉が飛び出ていて、その先っちょに紫色した小さなしずくみたいなものが垂れ下っていた。なんか、とてつもなく地味だな……いかんいかん、せっかく見せてくれたのに落胆した顔しては。

「これはタケという名の植物で、花をつけることは滅多にないからとても珍しいんだ。そうだね、だいたい６０年から、場合によっては１２０年に一度しか咲かないらしいよ」

「ひゃくにじゅうねん！？」

ひえぇ、貴重なもの見た気持ち。

「あとこっちの木も花が咲く種類だけど、残念ながら一年に五日ぐらいしか咲かなくてね」

「えー、そんなに短いの！？」

「でも東の国では、とても愛されている花なんだよ。花弁が淡いピ

ンク色で夢のように綺麗なんだ」

百年に一度しか咲かない花だったり、一年に五日しか咲かない花だったり……東の国って不思議な花があるんだなぁ。

それからしばらく温室中にある花をあれこれみせてもらった。ちょっと見近寄りがたいぐらい綺麗な外見とは裏腹に、フリード王子は気さくで結構話しやすい。

だからついついおしゃべりが弾んでしまい、やがて王子に「ところでそろそろ戻らなくて大丈夫？」と言われて飛び上がった……一体どのくらいここにいたんだ私たち？　早く戻らなくっちゃ！

フリード王子はパーティーへ戻る気がないらしく、サンルームから飛び出していく私を温室からのんびりと見送っていた。

パーティー会場へ戻ると、室内は相変わらず賑やかだったが、音楽は少しスローテンポになっている。そろそろお開きの時間が近いのかもしれない……やばい、冷や汗が出てきた。

――ええと、私が座っていた場所は……あ。

先刻まで私が座っていた椅子には、怖いほど表情を無くしたディルクの姿が……マズイ！

おずおずと近づく私の姿に気がついたディルクはゆっくりと立ち上がった。

「お疲れじゃありませんか」

「はへ？　お、怒らないの？」

「一緒にいらしたのがフリード王子だったものですから」

へー、ディルクってばフリード王子のこと知ってたんだ？
そういや昔、仕事でこの国来たことあるって言ってたしね。そっかー、よかった！

「……ですが私との約束を破って、勝手に広間を抜け出したのは別問題です」

ぐいっと手をつかまれ、あっという間にディルクの腕の中に引き込まれた。
片方の手は腰に回され、もう片方で手のひらをつかまれる。リードされるままダンスホールの中心近くまできてしまった……わわわ、まさか踊れっていうの！？

「私、足ケガしてて踊れないって予定じゃなかったっけ」
「スローダンスだから大丈夫です……ここならもう、逃げられませんよ」

――ま、まさか。

「だいたい、あなたは姫としての自覚が……」

やっぱりお説教か！
振りきって逃げたいところだけど、腰と手をがっちりホールドされちゃってて動けないよぅ。

「お説教なら部屋戻ってから聞くからカンベンしてよ……」
「いけません、叱るのは悪いことした時にしないと効果がないのです」

犬や猫のしつけか！
ものすっごく面白くなくて、私は下唇を突き出してそっぽを向く。
「人目がありますよ。もっと姫君らしく、にこやかにしてください」
にくたらしいから、歯をむき出して笑ってやる。
そんな私の顔を、冷笑を浮かべて見下ろす騎士様……周りの人たちにはどう映ってるんだろ？　姫と騎士の微笑ましいダンスなのか……遠目では。とほほ、現実はこんなんだけど。

窓の外を見やると、サラサラと粉雪が降り始めたみたいだ。
室内の灯りは暗めに落とされ、透明大理石を敷きつめたダンスフロアが幻想的に青く光っている。音楽はムードたっぷり、周囲の人たちの動きもそれとともにゆったり、ゆったりと揺れていた。
「……姫様、ちゃんと聞いてらっしゃいますか？」
至近距離には、私をのぞきこむ秀麗な顔。薄い唇にちょっぴり甘めの微笑を浮かべて……しかし目が笑ってない。これはかなり怒ってるよ！
「ごめん、なさい」
「分かればよろしいのです」
「じゃあもう戻っていい？」
「いえ、せっかくですから」
ディルクの手がくるりと回転した。ぐらりとまわった私は、一回転後にしっかりと支えられる。耳元に微かに響く、悪魔のささやき……。

「せっかくですから、踊りのレベルチェックをさせていただきます」
ああ……一難去ってまた一難か。

翌朝起きたら、窓の外は銀世界だった。
昨夜の晩餐会は日付が変わるまで続き、朝から始まる『公務』のために早朝から叩き起こされた私はかなり寝不足。うー、お布団から出るのつらい……。

二階の客室にいる私は、窓から庭を見下ろしてみた。
いろいろ木とか植えられてるみたいだけど、雪がかぶっちゃってよく分からないなぁ。それにしても　外は思いっきり寒そうなのに、それでも道行く人々はコートすら羽織らない。なんでシャツ一枚で平気なんだ……アリュス人おそるべし。

「あれ、ディルクだ……」
見慣れたマントを羽織った騎士様の姿に、私は目を瞬いた。
隣にコルティ姫の姿があったからだ。
コルティ姫は他のアリュス人同様、薄いドレス一枚で歩いている。
銀色の髪を朝日にきらめかせ、ディルクにエスコートされながら庭先を散歩してるようだ。
「姫様、いかがされました？」

朝食を準備してくれていた女官さんが、窓辺に立つ私に声をかけたのでふりむくと、そこにはテーブルに整然と並んだお皿とカップたち。

――おお異国の朝食……湯気が立ってて美味しそう。さっそくいただこう。

「それで何をごらんになってたのですか」
「ああ、コルティ姫の姿が見えましたので」

温かいお茶を受け取って、ひとくちすする。
はあ、美味しい。

「コルティ様は、毎朝お庭を散歩されるのが日課ですの。お身体が弱くていらっしゃるから、体調の許す限り外の空気を吸われるのですわ」
「そうなんですか」

あのお姫様、身体弱いんだ……この寒空の下、あんな格好で平気なのかな？　あんな薄着じゃ普通なら具合悪くなりそうだけど、寒さに異常に強いアリュス人だから大丈夫んだろう。

そういえば、まだコルティ姫にお土産渡してなかったな。
食事の後にでも渡しに行こうかな。

「ハンナ姫様も、お食事の後にお庭を出られてはいかがでしょう？
今日は美しい雪が積もってて、奥庭から眺める山々の景色は格別ですわ」
「……そーですね」

――ただし、すっごく寒そーですが……。

アリュスは常冬なんだけど、一年中雪が降っているわけじゃないらしい。

ちょうど今ぐらいの時期から半年ぐらい、ずっと振り続けるそうで……つまりはいっちばん、さむーい季節に訪れた事になる。国境越えした時はまだ雪降ってなかったのに。

「初雪は先週末でしたけど、今日の雪はこの時期らしい深い雪になるでしょう。明日から開催される『雪の祭典』は我が国最大のイベントですので、ハンナ姫様も存分お楽しみくださいね」

「はい、もちろん」

そう、この『雪の祭典』こそ、今回の公務のハイライトなのだ。なんでも雪像アートの品評会があったり、花火も打ち上げられるらしい。それで私は、その祭の来賓者として出席する予定なのだ。

「今年は初雪が例年より遅かったので心配でしたけど、これで雪像コンテストも開催できますわ」

「そっか、雪がたくさん降らないと雪像作れませんもんね」

「ええ、皆が毎年楽しみにしているイベントですからね。きっと今夜は夜通し雪像作りでおおわらわでしょう」

そんな話をしつつ食事を終えると、ひとりで部屋にこもっているのもつまらないので廊下に出てみた。ディルクはコルティ姫と一緒だろうから、鬼の居ぬ間になんとやら……で、ちょこっと王宮見学。

室内は温かかったのに、廊下に一歩出るとちょっと寒い。

急に思い立ったから部屋着で出てきたんだけど、これで大丈夫か

な……歩けば少しは身体温まるかな。

時折すれ違う人たちは、私の姿に気にも止めない。
どうやら私、王族オーラがゼロみたい……きっと私、お手伝いさんの一人と思われてる可能性大かも。

――ま、かえって気楽で助かるけどね。

階下へ降りる階段で制服姿の女官さんらとすれ違った。
なんだか楽しそうにおしゃべりしている。

「ねえ、コルティ様とご一緒だった殿方見た？」
「あの方でしょ、今ご滞在されている姫君の騎士って」
「素敵よねぇ。さっき庭先でコルティ様と散歩されてたわよ」
「ホント！？　ちょっと見に行こうかしら」

――まったく……どこへ行っても目立つんだな、うちの騎士様は。

それに比べてどうよ、仮にも姫である私の存在感の薄さは。
昨日到着したばかりだから、この王宮じゃあまり顔知られてないんだろうけど……それを言うならディルクだって同じじゃん。

「やっぱ女の人ってイイ男には目ざといんだなぁ……イケメン・センサーでもついてんのかな」

ぶつぶつ言いながら階段を降りたところで、ばったりコルティ姫とディルクに出くわした。

「姫様、お目覚めでしたか」
「あ、うん、ちょっと前に」

ツカツカと私のもとへやってきたディルクから、ヒヤリと外気の冷たさを感じる。

「お食事はもうお済みですか？　ところでなぜ、そのような格好をされているのです？　今日着るご予定のお召し物はどうされたのです？」

ああ始まった……普段無口なくせに、こーゆー時になるととたんに饒舌になるからやんなっちゃう。

この際ディルクは無視して、コルティ姫にごあいさつをしよう。

「おはようございます、コルティ姫」

「おはようございます、ハンナ姫様。外の景色はもうご覧になりまして？　とっても綺麗なのよ。今お庭を一回りしてきた所なの……ハンナ姫様の騎士を勝手にお借りしてごめんなさい」

「いやいやそんな。ディルクの一人や二人、いつでもどーぞ！」

――ついでにもうしばらく連れてってやってください……お説教されそうなんで。

アハハと愛想良く笑った私の横で、地を這うようなディルクの「姫様……」という低い声が聞こえたけど気にしない。よかった、コルティ姫、今日はご機嫌いいみたい。

「そうだハンナ姫様、あちらでわたくしのお茶に付き合って下さらない？　ディルク様、ちょっとハンナ姫様をお借りしても構わないかしら？」

コルティ姫はディルクにたずねると、ディルクはちょっと考える

ような素振りをみせた。

「姫様いかがされますか？　ご公務のお時間まで、まだ一時間ほどありますが」

「え、私？　いや別に、私はかまわないけど……」

コルティ姫は「じゃあ決まりね！」と細い指先でしっかりと私の腕を取った。私はなかば引きずられるようにして歩き出す。

ちらりと後ろを振り向くと、そこにはやはり微妙な表情のディルクが私たちを見送っていた。心配してそうに見えたけど、私の気のせいかな……？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2946y/

ナイトキラー

2011年12月4日00時46分発行